小津久足『石走日記』

菱 岡 憲 司

解題

『石走日記』は、文政七年（一八二四）、小津久足（一八〇四～一八五八）が二十一歳の折、九月三日に松坂を出て、近江の多賀大社に参詣した後、光格院の修学院離宮行幸を見物するべく京都に赴いて諸所を遊覧し、大坂・奈良を経て、十月四日に松坂に帰着するまでの紀行文である。文政五年の『吉野の山裏』、同七年の『江門日記』に継ぐ三作目であり、生涯四十六点の紀行文を残した久足においては、最初期の作となる。

「石走」は近江などにかかる枕詞で、『万葉集』には「石走る近江の国（石走淡海國）」（巻一、二九）「石走る近江の国（磐走淡海乃國）」（巻一、五〇）「石走る近江（石走淡海國）」（巻七、一二八七）の用例がある。近江にかかる「石走」は通常、「いわばしる」と読むが、「いわばし」と読む説もある。『石走日記』冒頭には「石走の近江国」とあり、天理大学附属天理図書館所蔵『石走日記』草稿では、「石橋の近江国」と書いたのちに「橋」を「走」と訂正していることから、ここでの「走」は「はしり」などではなく「はし」と読んでいることが確認できる。すなわち、冒頭は「石走の近江国」と読む。

久足は紀行文の題名に振仮名を振らないため、その命名の根拠となる歌や本文中の表現から察するしかないのだが、本文中の唯一の用例である「石走の近江国」からして、『石走日記』の読みは「いわばしのにつき」あるいは「いわばしにつき」とするのが適切であろう。仮に前者を採っておく。

本文中に「古事学ぶ身」（九月七日）との表現も散見するように、本居春庭のもとで古学を学ぶ二十一歳の久足は、歌を古風・今調と詠み分けた宣長のいとなみに倣い、折々『万葉集』の語彙を用いる「古風」の歌も詠み、長歌も五首詠んでいる。冒頭の「石走の近江国」との表現、および近江の多賀大社参詣に

もとづく書名は、そうした古学びの研鑽に励む久足の姿勢をよく示している。

しかし、文政十一年（一八二八、久足二十五歳）に師の春庭が亡くなると、天保初年頃から徐々に古学への疑いがつのり、天保五年（一八三四、久足三十一歳）の『花鳥日記』では、「おのれやまとだましるとかいふ無益のかたくな心は、さすがにはなれたれば」と「古学離れ（国学離れ）」をすることに「拙著『小津久足の文事』（へりかん社、二〇一六）、同『天才子小津久足』（中公選書、二〇二三）参照」。

つまり本紀行には、「古学離れ」以前で、いまだ本居学へ疑いを抱かない久足が、受け売りの尺度で種々の物事を断じる「かたくな」な態度が見受けられるのだが、一方で、後年の詳細さには及ばないものの、行程の丁寧な記述、折に触れての述懐の吐露など、久足紀行文の特徴はすでに備わっている。また、やはり久足紀行を特徴づける歯に衣着せぬ物言いも、本紀行ではとりわけ仏教批判に顕著である。「古学離れ」後は、批判の中心が仏教から古学へと変わったことを思うと、そもそも久足のこうした批判精神と辛辣な物言いは、皮肉にも、宣長の精緻な実証主義とともに「漢意」を排斥する激しい言辞を熱心に吸収した結果、培われたとも言える。

行程

ここで、『石走日記』中の地名・神社仏閣等を抄出して行程を記す。移動中は地名が、京都滞在中は神社仏閣等が中心となるが、あえて整理せずに同列に拾いあげた。

なお、久足は基本的に、地名を土地の者に聞いて記すため、現地での呼称が知れる一方、聞き誤りや記し間違いも散見するが、本書は後年の紀行に比べて

とりわけ誤記が多い。久足は草稿の段階で諸書を参照し、地図や地誌、先行する紀行文などで地名を正していると察せられるのだが、この時点では蒐書も十分ではなく、推敲も甘いのだろう。久足自身、それを気にしていたようで、日本大学図書館所蔵『石走日記』浄書本の内題の箇所には、「此日記誤おほし。よく直すべし」との付箋が張られている。

以下、誤りと思われるものは傍記で正し、また誤りでなくとも、現在と呼称表記が異なるものは、括弧にて現在の名を記した。

- 9月3日 松坂・三渡・津・部田・上野・寺家・不断桜・白子・久留末神社(久留真神社)・神戸〔木菜屋泊〕
- 9月4日 神戸・高岡川(鈴鹿川)・うつべ川(内部川)・追分(日永の追分)・小許曾(小古曾)・采女・杖衝坂・石薬師・甲斐川(鈴鹿川)・日の坪・高宮・熊野権現の御社・御社(加佐登神社)・白鳥の陵(白鳥塚古墳)・宝冠塚・装束塚(宝装塚)・熊野権現の御社・庄野・亀山〔亀屋泊〕
- 9月5日 亀山・野尻・皇館社(布気神社)・関川・大野・関・筆捨山・坂下・鈴鹿川・鈴鹿山(鈴鹿峠)・鈴鹿神社・女夫坂・猪鼻・かにが坂(蟹が坂)・田村川・田村神社・土山・松野川(野洲川)・市の瀬(一之瀬)・鎌掛〔柏屋泊〕
- 9月6日 鎌掛・日野川・木津・かうづけ野(上野田)・内池・小谷・石原・いものし(鑄物師)・岡本・大塚・おぶさ川(小房川)・佐久良川)・布引野・いまつき(今堀力)・いまさき(今崎)・中野・八日市・小幡の出町・恵知川・むかひの宿(愛知川)・市橋・杓掛・枝・千度・石畑・葛籠町・ほうぜ(法土)・高宮川(犬上川)・高宮〔松坂屋泊〕
- 9月7日 高宮・多賀・多賀大社・日向神社・あまこ(尼子)・鍵取社・高宮・小幡の出町・いんで(位田)・町屋・清水・老曾(老蘇)・鎌宮(奥石神社)・西往来・牟佐・牟佐下神(牟佐神社)・上田・御社(上田神社)・篠田神社)・馬淵(馬淵)・横関・善王寺(善光寺川)・鏡・鏡山・篠原・矢のむね川(家棟川)・野洲・野洲川・守山〔山田屋泊〕
- 9月8日 守山・今宿・焰魔堂・二町・へそ(巻)・いさ川・中沢・渋川・落野井・砂川(草津川)・草津・野路・野路の玉川・月輪・大江・勢田(瀬田)・長橋(瀬田の長橋)・石山寺・勢田・粟津原・膳所・義仲寺・大津

9月9日 札の辻・三井寺・三尾神社・札の辻・大津・蟬丸大明神(関蟬丸神社上社)・関清水大明神(関蟬丸神社下社)・諸羽神社・山科・天智天皇陵(御廟野古墳)・日の岡・粟田口・三条大橋〔茶屋泊〕

9月10日 京都滞在 堺町御門・鷹司の君の御館・日華門・月華門・正面門・紫宸殿・白川殿の御たち・八座ならび給へる神の御社(八神殿)・上御霊社(上御霊神社)・下御霊社(下御霊神社)

9月11日 京都滞在 二条・神泉苑

9月12日 京都滞在 吉田(吉田神社)・八神殿・大元宮・本社(本宮)・霹靂神社(神楽岡社)・かも川(鴨川)・川合神社(河合神社)・糺川(御手洗川)・下鴨の御社(下鴨神社、賀茂御祖神社)・井於神社(終の社)・出雲井於神社、比良木神社)・上鴨(上賀茂)・社家町・太田神社(大田神社)・御手洗川・御社(上賀茂神社、賀茂別雷神社)・大宮の社・今宮の御社(今宮神社)・大徳寺・船岡山・鹿苑寺・金閣・平野神社・紙屋川・北野の天神の御社(北野天満宮)

9月13日 京都滞在 南禅寺・真如堂(真正極楽寺)・永観堂(禅林寺)・銀閣寺(慈照寺)

9月14日 京都滞在 知恩院・長楽寺・双林寺・霊山(正法寺)

9月15日 京都滞在 祇園の御社(八坂神社)・安井の金毘羅の御社(安井金毘羅宮)・八坂の塔(法観寺五重塔)・清水の観音(清水寺)・地主権現の御社(地主神社)・大仏(方広寺大仏殿跡)・新日吉社(新日吉神宮)・耳塚

9月16日 京都滞在 深草・泉涌寺

9月17日 京都滞在 みぞろ池(深泥池)・市原・小町の墓(補陀落寺)・大原神社・二の瀬・鞍馬(鞍馬寺)・鞍大明神(由岐神社)・奥院(魔王殿)・兵法場・貴船川・貴船・奥院(貴船神社奥宮)・本社(貴船神社本宮)

9月18日 京都滞在 仁和寺・梅尾寺(高山寺)・楨尾寺(西明寺)・清滝川・高雄(神護寺)・広沢(広沢池)・祇園〔登楼〕

9月19日 京都滞在 山ばな(山端)・修学寺(修学院)・修学院の行宮(修学院
離宮)・赤山明神(赤山禅院)

9月20日 京都滞在 加茂川の堤(鴨川東岸)・柳茶屋〔柳茶屋泊〕

9月21日 京都滞在 〔御幸見物〕

9月22日 京都滞在 錦小路〔本居宣長影前会、本居大平主催〕

9月23日 京都滞在 〔暇乞いの挨拶回り〕

9月24日 三条大橋・建仁寺町・東福寺・通天橋・稲荷の社(伏見稲荷大社)・
藤社(藤森神社)・木幡・柳大明神(許波多神社)・歌芝・岡田・大和田・
萬福寺・彼方町・離宮八幡(宇治神社)・宇治上神社)・興聖寺・恵心
院・橋姫の社(橋姫神社)・平等院・扇の芝・縣明神(縣神社)・八幡
〔晝屋泊〕

9月25日 八幡・安居橋・放生川・放生亭・疫神堂・高良社・極楽寺・御社(石
清水八幡宮)・橋本・山崎・離宮八幡の御社(離宮八幡宮)・橋本・〔乗
船〕・道頓堀〔河内屋泊〕

9月26日 大坂滞在 坐摩の御社(坐摩神社)・廣田明神(廣田神社)・蛭子宮(今
宮戎神社)・住吉(住吉大社)・さしの姫松(岸の姫松)・天王寺(四天
王寺)・生玉社(生國魂神社)・仁徳天皇の御社(東高津宮)

9月27日 大坂滞在 〔芝居見物〕

9月28日 大坂滞在 〔芝居見物〕

9月29日 道頓堀・玉造・深江・若江・神功皇后の御社(若江鏡神社)・織部・
福万寺・尾崎・神館・たつた山(龍田山) 龍田越 十三峠越・こし
き塚(越木塚)・龍田川・龍田〔川合屋泊〕

9月30日 龍田・龍田神社・法隆寺・小泉・郡山・西の京・葉師寺・唐招提寺・
垂仁天皇の御陵(宝来山古墳、菅原伏見東陵)・安康天皇の陵(菅原
伏見西陵)・菅原の天神の御社(菅原天満宮)・尼が辻・奈良・猿沢の池・
采女の社(采女神社)・氷室神社・春日大神の御社(春日大社)・地主
の神社(榎本神社)・若宮(春日若宮神社)・八幡神社(手向山八幡宮)・
東大寺・二月堂(東大寺二月堂)・興福寺〔釜屋泊〕
奈良・子守町・率川神社・元興寺・穴栗神社・帯解・在原・一の本・
柿本人麿大人の御社(柿本神社)・石上・布留の御社(石上神宮)・丹
波市・浦権現・大倭・國魂神社(大和神社)・佐保・柳本・箸中・は

し塚(箸墓古墳)・鳥・三輪・大神の御社(大神神社)・日向神社(神
坐日向神社)・金谷・黒崎・出雲・初瀬・山口神社(長谷山口神社)・
与幾の天神(与喜天満神社)・泊瀬寺(長谷寺)・初瀬〔宇田屋泊〕

10月2日 初瀬・吉隠・萩原・大野・かたか(鹿高)・名張横川(名張の横河↓
名張川)・名張〔矢川屋泊〕

10月3日 倉持・新田・七見峠・阿保・大村神社・別府・岡田・伊勢地(伊勢路)・
垣内〔伊勢屋泊〕

10月4日 垣内・二本木・大のき川(大仰川↓雲出川)・はた(八太)・小川・三
渡・松坂

多賀大社参詣

書名の由来ともなった多賀大社参詣が、この旅の目的のひとつであるが、久
足にとつて多賀大社は命の親ともいべき存在である。参詣した九月七日に記
すとおり、久足は生まれてすぐに重い病にかかり、命も危ぶまれたため、祖母
ひでと母ひなは深く嘆いて、多賀大社に祈願をした。多賀大社の祭神は伊邪那
岐大神と伊邪那美大神の二柱であり、諸神の生みの親ということから延命長寿
の神として信仰されている。よつて嬰兒の助命を願ったわけである。記述は詳
細を欠くので、松坂から遙拝したのか、じつさいに多賀大社に赴いたのかはつ
きりしないが、病児の看病もあるであろうし、また母ひなは産後三十一日目に
亡くなつてしまふほど肥立ちが悪かつたため、おそらく遙拝したのでらう。久
足は一命をとりとめたので、ひでとひなは久足が六つになればかならず連れて
お礼参りをすると誓つたものの、ひなは間もなく没したため、久足六歳の折、
祖母ひでが連れて多賀大社に参詣したという。

このことを、『家の昔がたり』(拙編『小津久足資料集』雅俗研究叢書3、
二〇一九)では、次のように記している。

新右衛門(*父徒好)二子早世せしかば、それにおそれ、安吉(*久足幼名)
出生後、近江国犬上郡多我大社にいのりて、同社別当の弟子分とし、十歳
まで髪をおかず。七歳の時、御礼参に浄香大姉(*祖母ひで)・浄謙居士(*
父徒好)同道にて参詣させられたり。その事幼心にうすくおぼゆるを、今
おもへば又さだかなることあり。

徒好とひなは、久足が生まれる前に二子をもうけたものの、それぞれ生後九十六日と七日足らずで亡くしてしまう。そのうち、三たび宿した子が久足であったが、またしても命が危ぶまれたのであるから、多賀大社への助命の祈りは切実であっただろう。

興味深いのは『石走日記』に見受けられない「同社別当の弟子分とし、十歳まで髪をおかず」との記述である。明治の廃仏毀釈以前、多賀大社には不動院以下の神宮寺があり、別当不動院に所属する同宿輩(坊人)が多賀信仰を全国に広めたこともあり、近世では力を持っていた。よって出生後すぐの死を免れた久足は、その後も健やかな成長を願い、多賀大社別当の弟子分として十歳まで剃髪していたわけである。しかし「古学離れ」以前の『石走日記』では、神仏習合を好ましく思わないため、意図的に剃髪のことを記述しなかったのだろう。また『石走日記』では、六歳の折に祖母に連れられてお礼参りに来たことと記すが、『家の昔がたり』においては、七歳の折に祖母と父に連れられて参詣したという。記述の詳細さからも後者の記述を採るべきか。

さて、右のような事情で十歳まで多賀大社別当の弟子分であったのみならず、「此大神の御患のあさからぬこと」もを、祖母なりける人のもの、ついでごとにはかたりにで給へり(九月七日)というのであるから、久足は物心のついたころから、多賀大社に命を授かったとの思いが育まれていたであろうし、日課として、朝夕にはかならず多賀大社へ向かって遙拝することよって、日々その思いを確かなものにしていただろう。さらに言えば、久足の産後すぐに亡くなった母ひなのことは、直接的な記憶が残っていない以上、祖母ひでの語りから思いを馳せるしかないわけで、ひでがひなを語るとき、きつと多賀大社に祈ってくれたことにも触れたであろうし、また多賀大社を語るとき、ひなの死もおのずと想起されたはずである。参詣の折に詠んだ「おほけなきことにはあれど父のごとおもひてあふぐたがのおほ神」との歌は、多賀大社への尊崇と肉親への愛情が渾然一体となった久足の心情をよくあらわしている。

また、「かく古事学ぶ身となりては、猶さらたふとくもかしこくもおぼえ奉り」とここでは述べているが、「古学離れ」後、特定の立場に縛られずに、仏教にせよ儒学にせよ、秀でたものは認めるようになっていく久足は、とりわけ本居学の思想・語学の側面にかたくなさを覚え、批判を強めていく。それでいて、多賀大社はもとより、おしなべて神社への崇敬の念は変わらないのは、そ

れが本居学を学ぶ以前の、久足の出生と生い立ちにかかわる原体験に根ざしているからであろう。

小津久足の京都紀行

久足は生涯四十六点の紀行文を残したが、そのうち、じつに二十一点の紀行文で、京都を訪れている。そして『石走日記』は、京都を舞台にした久足紀行文の最初の作となる。もつとも、九月九日に「さきつとし、御即位のをりものほりて見奉りたることおもひ出られて」として、「あふぎしも八年の秋とへだてきてみるもかしこき雲の上人」との歌を詠んでいるように、久足は七年前(当年を入れて八年)の文化十四年(一八一七、久足十四歳)に京都を訪れて、九月二十一日に執りおこなわれた仁孝天皇の即位礼を見物したことが知れる。同年に久足は春庭に入門したばかりで、いまだ紀行文を記す以前であった。いずれにしても、生涯を通じてもつとも愛好した地、京都を記しとどめた最初の久足紀行文として、『石走日記』は意義づけられる。

前述したように、本書には神仏習合を厭い、仏教を批判する言辞が目につくのだが、逆に言えば、批判の言葉を連ねられるほど、わざわざ寺院をめぐっているとも言える。そうして見ると、神社にくらべて寺院の記述が淡泊なところに一応の遠慮は感じられるけれども、あらためて行程を確認すれば、行路にある名だたる寺院は漏れなく立ち寄り、京都滞在中も、神社のみならず、積極的に寺院めぐりにいそむ姿が浮かびあがる。清水寺にて「清水の観音はまうで、をがむ人のおほければ、我もをがむ」(九月十六日)と、書かずもがなの消極的な動機をわざわざ述べるのは、古学を学ぶ身としてのやましさをゆえだが、『桜重日記』(天保十四年(一八四三)、久足四十歳)で「中にもわがこのめるあたり」として挙げる京都の十五の名所のうちに清水寺があることを思うにつけても、頭ではいけないとあらがいがながらも、自然と心惹かれる様子が行間にはじみ出ている。やはり十五名所として挙げる萬福寺を訪れた折も、控えめな表現ながら「こはよの常にかはりて、中々にこちたくもみえず、めづらしくおほゆ」(九月二十四日)と琴線に触れていることは隠せない。九月三十日には、龍田神社・春日大社に加え、法隆寺・薬師寺・唐招提寺・東大寺・興福寺をめぐり、「すべてけふまうでたる寺どもは、仏所ながらもふるくものに見えたる寺々のこと

ゆゑ、さすがにたふとかりしは、例のいにしへをしのぶ心のくせなるべし」と述べる。たしかに「古学離れ」後に、「仏所ながら」という自主規制がなくなつたのちも、「いにしへをしのぶ心のくせ」は変わらず紀行文に見受けられるので、復古ならぬ尚古の姿勢は、久足の生涯を貫いていると言える。

このように、どう描くかという点では「古学離れ」前後で大きく変わるものの、どこを訪れ、なにをしたかという点に着目すれば、『石走日記』には、以降、二十もの数を重ねる久足の京都紀行文における、基本的なフォーマットが定まっていると言える。すなわち、松坂から京都への往還で足を伸ばして名所古跡を訪ね、大坂で芝居見物をし、京都滞在中は定点観測のようになじみの神社仏閣をめぐりつつ、行事を見物し、知友を訪ねるといふものである。「守り」を重ねる伊勢商人(松坂商人)らしく、基本的な行動パターンを踏襲しながらも、数を重ねるごとに内容面の充実をはかっているという見方もできよう。

修学院離宮行幸

多賀大社参詣に加え、この旅のもうひとつの目的は、光格院の修学院離宮行幸を見物することである。修学院離宮(修学院の行宮)は、後水尾院の意向で洛北の比叡山の麓に造営された離宮で、万治二年(二六五九)に一応の完成をみた。久足は九月十九日に次のように記している。

そもくこの行宮は、後水尾天皇の代々の行宮の爲にとて、たておき給へりとなむ。かるがゆゑに靈元太上天皇は享保といふところ、たびく御幸もありけるを、そのとしの十六年といふとしよりたえて、その後は御幸もなく、こたびまではおよそ九十四年にもなりぬ。

久足の言うように、後水尾院と靈元院は度々、修学院離宮に行幸したものの、享保十六年(一七三二)の靈元院行幸を最後に長く断絶していた。しかしこの文政七年、九十三年(当年を入れて九十四年)ぶりに行幸がおこなわれることになり、九月二十一日に光格院は修学院離宮に赴いた。

興味深いのは、久足は行幸に先立ち、修学院離宮をひそかに見物していることである。もちろん一介の商人にそのようなことが許されるはずはないので、久足は伝手を頼み、離宮の修理・手入れの役民を装い、箒を持って「潜入」した。されば、こたびのまうけにとて、年月もちりつもれる木々の葉をはき、よ

め、おひしげりたる草などをかりはらひ、あるは行宮のくちそこなはれたるをつくりかへなどせんためにとて、修理職より役民をおほくいれらるれば、伝をもとめてその役民のすがたになりて、箒をもちて修理職といふ印をおしたる札をこしにつけて、行宮の御門を入るなりけり。(九月十九日)

この伝手の名は明かされないが、当日「朝とく二条わたりの人にいざなはれて、修学院の行宮ををがみにものす」とあり、九月十日にも「二条のあたりにしる人のあれば、そをとぶらひ」とあるため、二条在住の某人が手引きしたと知れる。

現在の修学院離宮は、上中下の三つの御茶屋からなるが、中の御茶屋は明治期にもうけられたものであるため、久足の見たのは上下の御茶屋であり、その様子を以下のように描写している。

いとかしこけれど、そこかしこ見めぐるに、行宮は二所ありて、何とかやからめかしき名をつけられたり。山のた、ずまひおほどかに、紅葉いとおほくそめわたし、前には大きな池ありて、山よりおつる滝のながれ入るさま、中島の松のけしき、こたびあたらしくつくられたる石ばしのさまなど、いとおもしろし。さばかり高き所ならねど、東より南まではものもさはらずよくみわたされて、都の家居どもの手にとるばかりみゆるのみならず、よもの山々たゞこ、もとにみゆるさま、とりくめでたき行宮のさま、絵にかくとも筆およぶまじうおもはれて、えもいはずよにすぐれたる所のさま也。げに後水尾天皇の代々の行宮のためにとさだめ給へりしは、うべなること、しのび奉らるゝも、いとかしこし。(九月十九日)

上の御茶屋の浴龍池・雄滝、池中の中島に触れ、京都所司代内藤信敦が寄進した「こたびあたらしくつくられたる石ばし」こと千歳橋にも言及している。なお、行幸の際、光格院主催でおこなわれた歌会は、中島にある「何とかやからめかしき名をつけられたり」という窮邊亭で催された。

久足は行幸の前日である九月二十日に、鴨川東岸の柳の茶屋に宿を求めた。これは、「こたび御幸ある道の外の道には、すべて竹垣をつくりめぐらして、こよひの夜中ばかりより人を制して、竹がきを入ることをゆるさ」ないからだという。そして迎えた二十一日の夜明けごろから、鴨川に新しく設けた橋のほとりの芝生でうづくまりつつ待ち、辰の刻(午前八時)ごろに御先私(みさきざひ)の聲がして、ついに行幸を目にする。行列の描写は畏敬もあつて遠慮するが、長歌を

一首、反歌を二首、短歌を三首詠んでその感激を伝えている。

なお、この柳の茶屋および新設の仮橋については、やはり行幸見物のために京都を訪れていた本居大平が、『紅葉の御幸』（一冊。文政七年。東京大学文学部国文学研究室・本居文庫、本居帙四〇・一六二・甲・乙）のなかに書き記している。

（*文政七年九月）廿日。（*林 鮒主がいざなふまゝに、（*植松）茂岳・*田中（近藤）良樹などもなひて、御幸ならせ給ふ道をも見んとて、まづ堺町御門よりいりて、御所のまへより東に清和院口に出て、広小路といふ所、梶井宮のまへのみちより今出川すぢとかやの加茂川をわたりて、柳の茶屋といふ所にいたりぬ。こゝ、なん、かの蓑内氏（*宗右衛門（源政富）の思ひよりて、あすの御幸拜見の所にとさだめ契りおける所なる。此所は、高野川の流れあふ所にて、川はゞはや、ひろけれど、つねの水のながれ、東の岸つらをながれて、その水の上に、かりそめなるつち橋をかけて、川原よりわたりかよふ所なり。川はゞおよそ三十間あるべし。此西の方七八間と東のかた十五間ばかりと橋をかけられて、そのなからは川原のまゝながらや、高く、此二方の橋につゞきて、つくり道いで来たり。かくいふは、此度の御幸ならせ給ふ道の料に、あらたに作られたるなりけり。板の上に土をおき、その上に真砂をしきて、いとうるはしくはききよめて、西東に縄を引わたしてなんありける。今此茶屋のまへにやすみあて見れば、橋の上一目に見わたされて、あすの拜見の所によるしき所にもあるかなと、鮒主もいひ思へり。

久足は翌二十二日、錦小路にてその本居大平主催の宣長影前会に参加する。一柳（村田）春門や藤井高尚はじめ、二十人ばかりが同席した。場所はおそらく、大平『紅葉の御幸』に「錦小路服部敏夏」と見出せる宣長門の歌人、服部敏夏のもとであろう。

右に見た行幸見物が京都滞在のハイライトであるが、それ以外にも、吉田神社の伊勢例幣使派遣（九月十一日）や、大酒神社の牛祭（九月十二日）など、折よく催される行事があれば、久足は機を逃さずに見物している。

以降の京都を舞台とした久足紀行文でも、仁孝天皇の葬礼（『春錦日記』弘化三年（一八四六）、久足四十三歳）、孝明天皇即位礼（『橋日記』弘化四年）、新内裏御遷幸（『敷島日記』安政二年（一八五五）、久足五十二歳）を見物するため

に旅程を組むなど、晩年まで変わらぬ皇室行事への関心が、『石走日記』という初期の紀行文からすでに示されていることがわかる。なにより、「古学離れ」という画期を経ながらも、皇室敬慕の念は、いずれの紀行文にも見受けられる一貫した姿勢だと認めることができる。

書誌

『石走日記』は、天理大学附属天理図書館・日本大学図書館・三重県立図書館が所蔵する。天理本は草稿本、日本本は浄書本、三重本は転写本である。三重本は武藤文庫に「小津久足自筆稿本」として所蔵される（武藤文庫については、拙著『小津久足の文事』（前掲）三章「花鳥日記」参照）。ただし、「小津久足自筆稿本」と銘打っているが、三重本は久足の筆跡ではない。しかし転写本ながら、久足筆の付箋が付されるなど、久足の管理下にあったことが確認できる。すなわち、『陸奥日記』など他のいくつかの紀行文でも見られるように、久足は浄書本を転写させて副本を作り、机辺に備えていたのであり、この三重本も西荘文庫旧蔵本と判断される。今回、三重本を翻刻の底本とした。

三重県立図書館所蔵。武藤文庫（L980/オ/4 資料番号14009339）。一冊。二三・八×一六・二糎。袋綴。表紙は薄緑色の無地の布目地。外題「石走日記」と左肩に単枠題簽。内題「石走日記」。一〇行書。六〇丁（墨付五九丁）。印記「武藤蔵書之印」（朱陽）。胡粉・墨書訂正あり。付箋あり（二二丁オ）。奥書「文政七年といふ年の神成月／小津久足」。

注

1 十月一日に長谷寺へ参詣した折、「はしりでのよろしき山のはつせ山ほとけ所となるもうれたし」と、初瀬山が仏所となっていることを憂う歌を詠むが、つづけて「とおもふも、例のかたくな心と我ながらをかしくなむ」と、それは「かたくな心」であるとも自覚しており、後年の「古学離れ」につながる素地が見受けられる。

2 自身の命と引き換えのように母ひなが亡くなったことで「久足の心になきなトラウマを残すことになったのではないか」と、生まれて十日後に

母を亡くしたジャン・ジャック・ルスーの例を引きつつ、柏木隆雄は考察を加えている(「五十三 生まれ出ずる悩み―ルスーと久足」『本居宣長・本居春庭・小津久足・小津安二郎 伊勢松阪の知の系譜』和泉書院、二〇二四)。

3 神仏習合を厭う姿勢は、九月八日に三井寺に参詣した折、三尾神社が寺の鎮守のように祭られていることに憤っている様子などにかがえる。

4 長島弘明は、上田秋成が五歳の折、重い瘡痂にかかって命が危うかったところ、父が香具波志神社に祈願して命を助かった経験から、「合理主義者でありながらも、神秘的なものの存在を否定せず、時としてそうした神秘的なものへの志向を示す」と指摘しているが(『雨月物語の世界』ちくま学芸文庫、一九九八)、後年、秋成を慕ってその著作を収集することになる久足に、同様の体験と傾向が見受けられるのは興味深い(もともと、久足は怪異は好まない)。

5 盛田帝子「光格上皇主催御会和歌年表―文政期編」(『大手前大学論集』二〇、二〇二二)の年表を追うと、文政六年九月二十三日「修学院御茶屋御幸の費用について、御附衆より両役に申達」、同七年二月二十六日「修学院離宮御茶屋造立の木作始地曳を行う」、同年四月十八日「修学院離宮御茶屋礎立柱を行う」、同年七月四日「九月中下旬に修学院山荘に御幸の旨を仰せ出す」、同年七月二十七日「修学院離宮御茶屋の上棟を行う」、同年閏八月二十九日「九月二十一日卯刻に修学院山荘に御幸の事、治定」(以上は『光格天皇実録』にもとづく)と、修学院離宮行幸にいたる経緯が確認できる。また、行幸当日の九月二十一日には、光格院の主催で修学院御幸御会・修学院御座がおこなわれており(「修学院離宮ニ御幸アラセラル、窮邃軒ニ於テ和歌御会ヲ行ハル、又、当座御会アリ、次ニ管絃ノ御遊アリ、笛、笙、箏、琵琶ノ御所作アラセラル。」「光格天皇実録」、御会記録も残る)。

翻刻

凡例

- 一、三重県立図書館所蔵『石走日記』(武藤文庫「小津久足自筆稿本 5」L980/オ/4 資料番号40049339)を翻刻した。
- 一、読解の便宜を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・段落冒頭の字下げを施した。
- 一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。しかし、固有名詞は旧字体を残したものもある。また、「玉」を「給」、「哥」を「歌」、「比」を「頃」、「斗」を「計」、「宦」を「官」とした。
- 一、日付が替わることにより一行を空け、小見出しとして、ゴチック体で原文にはない日付を加えた。

(外題) 「石走日記」

(内題) 「石走日記」

文政七年(一八二四)九月三日

石走の近江国多何社にいます大神にまうづべきよしありて、年頃心にはいかでくとおもひわたりつれど、さがりがたきさはりのみにて、とみにいでたつこともかたければ、くちをしかりしに、今年文政七年といふとし、さはりもなければおもひたちぬ。さるはこの秋、太上天皇の北山に行幸あるよし、風の便にき、つれば、それをもをがみ奉らんとて、いでたつになんありける。明日た、むとての日は、ぬさきさみ、あるは旅のまうけなどすとて、いとまもなし。

まのでむとながきとし月心さへくだきぬさを神はうけてよ
ころはなが月の三日、よふかく立いでんとす。家の別は、いつとてもをしきならひなれど、こたひはさばかりひさしき旅にもあらず、心からおもひたちぬることなれば、

このたびはうしとおもはでおもひたつ道にこゝろもゆく別かな

あひともなふ人はあらで、供のをのこばかりをぐして、たゞ独出たちぬ。三渡にて夜は明はてにければ、おくりにとてきたる人々にはこゝにてわかれて、供のをのことふたりになりぬれば、いそぐ旅路ながらもいとつれづれ也。されば今より、ゆくさきのことゝもの心にとまるふしをだに書つけつゝ、ゆきなば、なぐさむかたもありなむと、ふところ紙とうで、しるさむとす。

四里といふに津の宿にいたる。部田ていふあたりより、上野の宿にゆく道と椋本の宿にゆく道とあり、われは椋本の宿のかたにゆくべきなるに、おもふよしあれば上野の宿のかたに心ざして、此里を出はなれたるあたりより、みわたしたるさま、北より南の方を山々ならびたり。その山々は椿嶽の、ほり、鈴^⑧茄山・百丈嶽・経峯・布引山などなり。

ひとりゐるものさぶしきに村山のいむる、みればともしくおもほゆ

二里といふに上野の宿、又一里半といふに白子の宿にいたる。

このさとの入口、寺家といふあたりに不断桜といふ桜の木のありて、花のをりならねど、いとおもしろくさきたるに、かたへの葉どものみぢしたるは、いとめづらし。

もみぢする枝に花さへさくら木をひとかたならずあはれとぞみる

久留末神社の御前をすぐとて、

故郷にかへりくるまでまさきくと道ゆきぶりにたのみてぞゆく

一里半といふに神戸宿にいたりて、木菜屋何がしといふもの、宿にやどりぬ。

九月四日

四日。暁がたにやどりをたちて、高岡川・うつべ川など朝川わたりて追分といふ所にいたる。こゝより右にゆけば江門、左にゆけば京にゆく道のちまた也。されば左のかたにわかれて、並木の松原を五六町ゆけば、小許曾村なり。このさとの入口に木ぶかき杜あり。こは『式』に見えたる御社なるべし。八町ばかりゆきて、采女の里にいたる。

つぎの葉のいひつぎ、てやこのさとに三重の采女が名はのこりけむ

歌よみて罪ゆるさえしわがた、みみへのうねめがいにしへおもほゆ

このさとを出はなれてのぼる坂を、今も杖衝坂といふときくに、かのふることおもひいでられて、

や、くにあゆみましけるいにしへをおもふもかなし杖衝の坂

いにしへをおもひいづるもかなしくて涙つきせぬつぎのさかこのあたりより北のかたに伊吹山の見ゆるにつけても、ことさらいにしへのことぞしのぼる、。

追分より五十丁といふに石薬師の宿也。この宿ちかきあたりに山辺村といふがありて、五十師原のかり宮のあと、あるは山辺御井などもありときけど、道いそがれて、さまではえもたづねず。

このたびはゆかですぐとも又こむとちぎりむすばんみるのまし水行宮のあとをおもへどいしの原よることかたしみちいそぐ身は心にかかせぬもくちをし。

宿を出はなれて二十町ばかりもゆけば川のほとりにいづ。こは高岡川の川上にて、こゝにては甲斐川といふとぞ。川にそひてすこしのばれば、高宮といふさとあり。道のほとりには家二軒ならではなくて、北の方につゝきたる里也。

こゝにて白鳥の陵の御ことたづねたれば、あるじにやあらむ、「そはこゝより入りてゆく也。されど道しれがたし。酒代給はらば、案内しまあらせん」といへば、「そは心にまかすべし。いざ」とて、そののを先にたて、ほそき道を八町ばかりゆけば、熊野権現の御社あり。その御社の右の道より四五町ばかりもゆけば、又御社あり、「白鳥山陵御蓋殿」といふ額をかけたなり。又この御社の右の道よりすこし出はなれたる所に、御陵はありて、いと大きななり。「能煩野陵は大かたこれなるべし」と故翁の考にもいはれて、なほなにくれの塚どものことをあげつらひたまへる中の、日の坪といふ小山は、われもけふみてきつれど、またく陵のさまにあらず。それとはやうかはりて、この塚はちかきあたりに、いにしへのほりの堤のなごりめかしきものなどもかづゝのこりて、南の方より北まではいさゝかの木立だにみえず、たゞ大野のかぎりにてめもおよばぬさまも、能煩野陵とあるによくあひ、今にしら鳥塚といひて、杖突坂にほど、ほからぬあたりなれば、能煩野陵はいよゝこれなるべくおもふにも、ふるごとおもひ出られて、かなしさたゞならず。

この野べにながくのこりてところづらとこよにたへぬみはかたふとしいにしへのはゆまづかひのすゝろにもかなしきものかみはかをがみて

空よりもゆかむものをとのらしけるみたまやつひにあまかけりけむ

なきたまも我家しぬびて白鳥の天かけりてや飛いましけむ

はしけやしわぎへこひしくおもほし、御こゝるもへばなみだぐましも

しるべのをのこにとへば、「この野は今ほひろせ野といふ」といへり。そはひろきより名づけたる名なるべし。陵は白鳥塚とも経塚とも茶白山とも、又は「かさごさま」「たけべさま」などいへり。

さて、このちかきあたりに桜の木ありて、花のさく時は、花のさかさまにつきてさくとぞ。そを里人のいひつたへには、「倭建命のつき給ひし御杖をさかさまに土につきたて給へるが、つひに根のいできて花のさきたるが、今にあるなり」といふといへど、いとうきたることゝもなり。

宝冠塚・装束塚といふがありといへば、何とかやその名のなつかしくて立よりにて見るに、いとちひさき塚ども也。

かくてもとの道を熊野権現の御社のあたりまでかへりて、それより道をかへて庄野の宿にいでぬ。さてこたびはこの陵をはじめ、このあたりのさま見まほしうおほゆるまゝに、関のかたにすぐにはものせで、こなたにきたるなりけり。庄野をいではなる、ほどより日もくれかゝりぬれば、道いそがれて何くれの里をすぎぬれど、里の名だにもさかやみぬ。二里といふにからうじて龜山の宿にいたりて、龜や何がしといふものゝ家にやどりぬ。

九月五日

五日。あけはなる、頃、やどりをたちて、十町ばかりもゆけば野尻といふさとあり。こゝに皇館社といふあり。『式』に見えたる「野志里神社」ならんかともおもはるれど、所たがひたれば、あらざるべし。されど木立ものさびてやうありげなる御社也。

こゝを出はなるれば左は関川にて、流にそひて堤の上をのぼりゆくほど、道いととほきに朝風すゞろ身にしてみてわびし。

風わたるつゝ、みの道をたもとほりたもとさむけき秋の川つら
大野村といふをすぎて、関の宿にいたりて、

④ 駅路の名にのみいまはとゞまりてすゞかのせきのあとふりにけり

宿を出はなれてしばしゆけば、道の左に筆捨山といふ山有、あたりを山川のながるゝさま、水の音いさぎよく、けしきえならぬ所也。げにむかし狩野何がしといふ画にたくみなりける人の、この山のけしきをうつしかねて筆をすてけるより、かくは名づけたりとぞ。

言の葉はかけてこそ見めうつし糸の筆はおよばぬけしきなりとも

坂下の宿より坂路にかゝる。山は音にもきこえたる鈴鹿山なり。名だゝる八十瀬は道の左をながるゝ川なるべし。岩にふれてはくだくる波のけしき、あかずめづらしくおぼえて、立どまりては見つゝ、ゆく。

みなのめでてぞとまるすゞか山これや八十瀬の波の関守
岸のほとりにそめたる紅葉のみゆるは、ひとしほおもしろし。

ふりすて、波たちかねつ鈴鹿川こゝろもうつるきしのみみぢ葉

坂路をしばしのほりたる所、左のかたに鈴鹿神社おはします。猶のほりてたむけにいたる。こゝより伊勢の海、志摩の国までもいとよく見やられるれど、わがすむかたはかたへの山にさへられて、妹がふるらん袖も見えず。まことや、「なびけ此山」とはかゝるをりにぞいはまほしき。すべて此山のみみぢまだしけれど、そこかしこにをりくゝそめたる色の見ゆるは、中々にめづらし。

紅葉には人こそとまれすゞか山せきもる人はあらずなりても

この峠に杭をたてたるは、伊勢の国と近江の国のさかひなりとぞ。

わがすめる国はなれてゆく旅のうきにあふみの名こそつらけれ

山路をゆきくゝて女夫坂といふさかにいたる。こはおなじやうなる坂のふたつあるなりけり。

いかばかりふかき女夫の中ならんあふみの国にあるをおもへば

猪鼻・かにが坂などをすぎて、田村川といふ川をわたりたるむかひに田村神社といふおはします。こは坂上田村丸の君をまつりたりとかや。何のゆゑよしありてこゝにはまつれるにか、ものにもみえねはいぶかし。

こゝよりは土山にほどもあらず、坂下より三里なりとぞ。土山の宿にいたりて、この宿の半より左のかたにわかれて、多賀のかたにゆく細道に入りてゆきて、松野川といふ川をわたる。此川のむかひを市の瀬といふ。その里を出はなれて山路にかゝりて、のほりはてたるたむけより近江の海までよくみやられて、けしきよし。

猶おなじやうなる山路をゆくほど、いと、ほし。からうじていでたる所は、鎌掛の宿にて、こゝに柏屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。

九月六日

六日。明がたやどりをたちいづるに、霧いとふかし。

鎌掛の里たちいでて朝ゆけばきはらひつゝ、秋風ぞふく

日野川といふをわたり、木津・かうづけ野・内池・小谷などいふをもすぎて、石原の宿にいたる。いものしといふ里にて、

ひとりのみ旅ゆくわれは身のよそにおもはでかよふいものしのさと

岡本・大塚といふをすぎて、おぶさ川といふをわたる。むかひのさとにてもなどくひて、そこを出はなれば布引野といふ野原にて、いとひろし。三上山をはじめ、よもの山々ものにもさはらずみえて、けしきよし。

紅葉の一本、二本そめたるを、

白妙のそれにはあらでもみぢ葉のにしきもつゞく布引の野辺

いまつき・いまさき・中野などいふをすぎて、八日市の宿にいたる。こ、より二里ばかりは里といふべきさともをさくみえず。山道あるは畦道などを小幡の出町といふにいづ。およそ土山よりはまではゆき、もとまれにて、道もほそきかぎりなれば、心ほそくもわびしくもおもひたるに、こ、は尾張の国より都にかよふ大路にて、道もいとひろく、ゆき、もこよなくおほければ、うれしくさへぞおもはる、也。

恵知川をわたりてむかひの宿にいたる。市橋・杵掛・枝・千度・石畑・葛籠町・ほうぜなどいふをすぎて、高宮川をわたりてむかひの宿、松坂や何がしといふもの、家によどりぬ。今は多賀の御社もちかくなりぬるをおもふに、いとうれし。あすはまうづるまうけに、ゆあみなだす。

九月七日

七日。明がたに宿りをいでて、かの御社にまうでむとす。

半丁ばかりゆけば、右のかたに「多賀大社」といふ額をかけたる鳥居たてり。こ、よりは心もゆく道なれば、足もかろきこ、ちのせられて、ほどもなく多賀の里にいたる。一里といへど、いとちか、りしとおほゆるも、心からなりかし。石の鳥居のたてりし跡の石ずゑばかりのこりたる所より、一町ばかりもゆけば、そり橋あり。わたりてすこしゆけば御社なり。大前ちかくしづかに心いれてをがみ奉るも、まことにとしごろのほいかなふこ、ちして、いとうれし。

さるは、わがみうまれいでてほどなく、いとおもき病にか、づらひて、すでに命もあやふかりしかば、母と祖母なりける人とふかくなげき給ひて、はるゝとこの御社にしもねぎごとし給ひたるに、たふとくもしるしありて、病もこゝろよくなりぬれば、いみじうよろこびて、六つになりなばかならずあてまうで

て、かへりまうしはせさせむとうけひ給へるに、母なりける人はほどなくむなしくなり給へれば、わが六歳の時には祖母なりける人のあてまうでさせ給ひしなり。

かくて此大神の御恵のあさからぬことゝもを、祖母なりける人のもの、ついでごとにはかたりいで給へりしかば、をさな心にもたふとくおほえて、朝夕にはこなたにむきてをがみ奉らぬことはあらざりしに、かく古事学ふ身となりては、猶さらたふとくもかしこくもおほえ奉りて、わが身のかくてあるも、またく大神のみかげぞ、そのをりねぎごとをまうさずば、いかでかかてあるべきやと、おもふにつけては、ふりはへても又まうでまほしくおもひあたりしことなれど、何くれとさはりのみして、十六年をへて、ことし廿一にてかくまうでつるも契あさからず、うれしきかぎりなし。

朝夕につねをがむ身はけふさらにこひのみまつる言の葉もなし

おほけなきことにはあれど父のごとおもひてあふぐたがのおほ神

こひのみし神のめぐみはいちじるくたがはで人とされる身ぞかし

古事をまなぶわが身となりぬるもおもへば神のみたまなりけり

ことし又この御社にまるでしも神のめぐみのほかならめやは

むかし祖母なりける人とまうでしをりのことは、いとほのかにおほえたるに、その人も今はなき人となり給へることをおもふに、いとかなしくて、

神垣やへだてしとは十とせあまりむかしのことをおもひいでつ、

引つれてそのかみ垣にまるでしは年さへこゝらへだて来にけり

しらゆふのしらぬむかしものばれて袖よりなみだのかゝるかみがき

この御社は『古事記』にもみえて、いとまたふとき御社なるに、大社の列にもくは、り給はぬはいかにぞや。

さて、かしこけれど御社を心とゞめて見奉るに、今は二座相殿におはしまして、横も堅も五間ばかりあり。ふるくもみえ給はぬは、いにし年、御子の大神のみあらびにてやけ給へるをり、つくりかへられたるなり。かの石ずゑばかりのこれる鳥居も、そのをりくづれたるなるべし。

今とはとて、御前をた、むとするをり、

たがにます大神にまたまゐくるもちかつあふみの名をやたのまむ

もとのそり橋をわたらで、御社の御前なる道を北のかたに一町ばかりゆけば、『式』に見えたる日向神社おはします。祭神は瓊々杵尊なりといへど、よくお

もへば日向といふよりのおしあてにはあらかじか。この御前の橋をわたれば、かの石ずゑのある所なり。あまごといふ所に鍵取社といふおはしませば、これにまうでて、もとこしおなじ道を高宮の宿にかへりつきぬ。

さて、こ、よりも又きのふこし同じ道を小幡の出町までかへりて、それよりの尾張より都にもする道をゆく也けり。いんで、町屋といふをすぎて、清水の里にいたる。こ、にてもくのくひなどず。このさとより佐々木御社にゆく道ありときけど、道いそがれてえまうでず。

十町ばかりゆけば老曾の里なり。こ、に名だかき杜もありて、石の鳥居に「鎌宮」といふ額をかけたなり。この御社は『式』にも「奥石」とみえたるを、いかでか鎌宮とはいふらんといぶかし。

杜の名のおいそとわが身なるまでもまさきくあれと神にいのらむ

ものふりし木々の梢にもりの名のしるしもみゆる神のみやしろ

もみちのちるをみて、

色そめし木末も今はちるばかり秋も老曾の杜のみぢ葉

西往來村といふをすぎて牟佐宿にいたる。入口に神社おはしますは、『三代実録』に「牟佐下神」とみえたるなるべし。又「牟佐上神」とあるもこのさとこそおはすらめと、心をつけきたるに、宿中にはちひさき御社だにみえず、宿より一町ばかり西に木ぶかき杜ありて、御社おはしますにや、鳥居たてり。家もいさ、かありて、そこを上田村といふとぞ。上田といふ名もよしあれば、上神はこれにはあらかじか。

馬淵・横関・善王寺などいふをすぎて、名だかき鏡の里にいたる。鏡山は左のかたにある山をいふなりけり。

立よりて見ればゆかしな鏡山うつるもやさし旅のやつれは

しばしゆけば篠原のさと也。こ、にてはや日もくれか、りぬるに、をりしもしぐれのふり出たるは、いとわびしくて、

袖ぬらすふしをもそへて篠原のさとふく風にしぐれ来にけり

矢のむね川といふをわたりて、野洲村也。牟佐よりこ、まで三里といへど、いと、ほきに、日もくれぬればことさらにこそ。

野洲川をわたるに、川原のほど八町ばかりありて、しぐれは猶やまず、川風さへ身に袖うちしをる、も、いとわびし。

とのぐもりふり来る雨のくるしさにやすの川原もことにしありけり

からうじて守山の宿につきぬるうれしき、いはんかたなし。こ、に山田屋何がしといふもの、家にやどりぬ。

九月八日

八日。明がたに宿をいづるに、けさも霧ふかし。

今宿・焰魔堂・二町・へそ・いさ川などいふをすぎて、中沢といふにいたる。こ、より西のかたにあたりて比叡山の霧のたえまよりいさ、かみえければ、

朝風もふきはらはでや大日吉の山はみきりのはれせざるらむ

洪川・落野井・砂川などいふをすぎて、草津の宿にいづ。今は都もちかづきぬるこそ、こよなくうれしけれ。

野路といふ所に玉川の跡なりとて、いさ、か芝生のありければ、

萩こえて色なる波のあともなくうつりにけりな野路の玉川

月輪といふあたりより近江の海いとよく見ゆ。このころ山ふところのみにて、今見付たるはめづらし。

大江をすぎて勢田にいたる。長橋のうへより湖を見やりたるさま、けしきよし。水鳥どものうかびたるを見て、

近江の海せたのわたりにはほ鳥のかづくをみればいにしへおもほゆ

このついでにおもひつづけし。

にほといふ跡もなき名をこの海にたがかけそめし波のぬれぎぬ

こ、より十八丁ゆきて石山寺にまうづ。山門を入たるところに紅葉おほし。げに名もしるく、めづらしき石どものおほかるは、よき見ものなり。湖のかたにのぞめる所より見たしたるけしき、比叡山・比良嶽・三上山・鏡山などをはじめ、いづこもくくのこりなくみやられて、えもいはずおもしろし。

石山やたつことかたしき波のなみくならぬうらのけしきに

近江の海見たしひろきなかに先にこそか、れ勢田のながはし

あふみの海か、るけしきもあるものをみるめも波と誰かいひけむ

とこ、ろづきなし。

もとの道を又十八町かへりて、それより勢田の町を出はなれてしばしゆけば、粟津原なり。膳所の町のすぎ、馬場といふ村のなかに義仲寺といふありて、その庭に木曾義仲ぬしの墓のあるをみて、

きえにける名ごりとこのころはかなさに涙もか、るあはづの、露

朝日にもた、へし君が夕日なすかりましけるあと、ころこれ
大津にて、

今もしかにぎはふみればこのさとはふりし都のあと、しもなし
札の辻といふより五町ばかりもゆきて三井寺にまうづ。のほりて堂のまへよ
り見たしたる浦のけしきは、石山にまさりておぼゆ。唐崎の松はいとほの
か
にみえたり。

名にたかきみどりとさすがめにたちてこ、からさきのまつは見えけり

奥院といふにまうで、本堂、あるは経蔵などをみるに、いとものさびたり。
今の世にいらかをきらぐしくつくりかざりて、おろかなる世人をまよはしひ
きいる、法師どものしわざとは、こよなくかはりて、

仏らをいつくいらかもものさびてさすがたふとくみるのふる寺

三尾神社といふおはします。この大神は『式』にもみえたるたふとき神なる
を、この寺につきたる鎮守などいふもの、やうに、こ、にしもいはひまつりた
る法師のしわざこそ、いとにくけれ。

もとこし道を札の辻までかへりて、大津を出はなれてしばしゆけば、蟬丸大
明神といふ神おはします。この御社は「これやこのゆくもかへるも」といふ歌
によりて好事後のよのさかしらびとのつくりたるなるべし。

「逢坂をうちこえければ」などうちずんじてゆくほど、湖うしろのかたにい
とよくみゆ。

あふみの海しらゆふ花にさく波をたむけにからむあふさかの関

関清水大明神といふもおはします。これも「影みえて今やひくらん」といふ
歌によりてつくりたる御社にはあらじか。

このあたり牛車どものおほきを見て、

神のごと岩ねとよもし牛車あふさかやまをひきのぼるみゆ

一里といふに山科にいたる道の右のかたに諸羽神社といふおはしますは、い
かなる神にか。天智天皇陵は御廟野と申て、道より五六町右の方なる木しげき
林を申也。こはこの天皇の御沓のおちたるををさめたるなどものにみえたるは、
いかにぞや。『万葉』に「山科の鏡の山」とあるものをや。

つくりけるとしはうつれど鏡山たえぬみさ、ぎみればたふとし

日の岡といふあたりにて日もくれか、りければ、

こ、にして入日の岡の名もつらしまたゆくさきのほどもとほきに

粟田口といふあたりにて、

白雲のあはたの山をこえてきてみさとにちかくなりぬるがよき

かくて戌の刻ばかりに都につきぬるは、うれしともうれし。三条大橋ちかき
あたり茶屋何がしといふも、の家にやどりて、こ、をしばしの旅居とさだめつ。

九月九日

九日。日よし。

みまほしき所はおほけれど、いづかたもくまづさしおきて、大内をみ奉ら
んと宿をいづ。堺町御門といふを入たる所、東側にいといかめしく家かまへし
られたるは、天下の政きこしめす鷹司の君の御館なり。御門には神事策をたて
られて、文字は「御神事也。僧尼重軽服不浄輩不可参入」とか、れたり。こは
この月十六日・十七日には伊勢の神嘗祭なれば、御ものいみの内なればなるべし。
さて、日華門・月華門・正面門などはいときらくしくつくりみが、れたり。
紫宸殿をはるかにをがみ奉りたるは、かしこともたふとしとも詞ぞなきや。

けふは節句にしあれば、ほぎごとまうしに雲の上人たちのゆきかひたまふを、
うづくまりてみ奉るも、めざましくかたじけなし。さきつとし、御即位のをり
ものほりて見奉りたることもおもひ出られて、

名もしるくたひらの宮のみや人は神もゆたかにみよぞたふとき

あふぎしも八年の秋とへだてきてみるもかしこき雲の上人

は、おほくゆきかひ給へど、法親王はけふはみえ給はず。こはかの御物忌のう
ちなればなりとぞ。かくやむごとなき君たちをさへはかりたまふことは、ま
ことにたふとき御令にて、皇国の年ふりの千とせにくちせぬほど、いとたふと
し。常は仏さまもさすがにおこなはれて、法師どももはびこるものから、か、
るをりにはかくきびしくいみ給ふことよ。おもへばかしこくおほえて、おほけ
なきことながら、うれしくなむ。

猶何がしの君、くれがしの君の御館どもをもことくくみめぐりたる中に、
白川殿の御たちのついでに、八座ならび給へる神の御社見ゆ。こは『式』
に「御座祭神八座」と見えたる神の御社なるべし。

それより上御霊社にまうでて、

下までもれぬめぐみをいのる哉かみのみたまの宮にまゐきて

下御霊社にもまうでて宿にかへりぬ。

九月十日

十日。二条のあたりにする人のあれば、そをとぶらひがてら神泉苑にものし
てみるに、今は仏所となりて、いとせまくあれたるを見て、

御幸せし神の泉のそのかみを水のこゝろもなほしのぶらむ

とおもひやられて、いとあはれ也。こゝは大内裏の名こりなりとおもふにも、
なつかしくてめとまるこゝちす。

九月十一日

十一日。けふはそこかしこの御社をがみめぐらんと、朝とく宿りをいで、
まづ吉田にまうづ。さるは、けふ伊勢の例幣使のいでたち給ふををがみ奉らん
とてなりけり。けふこの所よりいでたち給ふことは、今は神祇官のたえてなけ
れば、こゝをかりそめの神祇官として、上卿より祭主に宣命をこの所にてわた
し給ふ行事のありとぞ。そは八神殿の御前にておこなひ給ふとか。橋のこなた
にて人を制して、をがむことをゆるさず。もとよりけふは、この所あづかり給
へる吉田の何がしの君だに橋よりむかひに入給ふことはかたしとなむ。

かくて橋のこなたにしばしまち居るほど、みさきおはせて弁の役をつとめ給
ふ何がしのわか君、祇承の役をつとめ給ふ何がしのわか君たち入きますと、ほ
どなく祭主藤波三位光忠卿、王代の何がし、忌部代の何がし、上卿庭田三位重
能卿も入きまして、八神殿のかたに入ましぬ。

行事はほどなくはて、はや伊勢の国のかたをさして発給^ぞふ。そのさまは、
先さきに幣帛ををさめたる筥ふたつをになはせて、それにつきそひたまふは忌
部代、そのつきには神馬二疋を先にあゆませて、夫には王代つきそひ給ひ、そ
のつきには祭主の君、宣命をうや／＼しく御ふところをさめていでたち給ふ。
神馬ばかりは楼門のそとにとめて、伊勢まではひかず。こはむかしの行事の
かたちばかりをおこなふなるべし。

むかしよりのたえぬためしもなが月のけふ御使のたつもたふとし
かたばかりのこるみわざもいにしへのためしがはぬことぞかしこき

そも／＼こゝを神祇官の代としてかくいでたち給ふにつけておもふに、神祇
官は百官のうちにもいとやんごとなきかぎりにて、大政官のうへにさへおかれ
て、さばかりおもかりつる官なりけるを、かくかりそめになりぬることぞ、かな
しくなげかはしけれ。

こゝにのみなごりとめてそのかみのみたちはたえしことぞかなしき

さて、行事もはて、人をゆるせば、八神殿にまうで、見るに、そのまへにあ
たらしき殿一間、大元宮の前に殿一間をたて、入口にはあらたに鳥居をたてた
り。こは、けふの行事のまうけにたてたりと見えたり。

さて、このこの御社のさま、心とめて見奉るに、大元宮といふ名のあやし
きのみならず、たてさまも仏めきて、そのまへには国々の式社のかずをしるし、
六十四社をたてならべ、八神殿をはじめ、朱といふものにてあかくぬりたるは、
いとかゞ也。いかにかりそめなりとて、かくまであやしくなりたるこそ、か
へす／＼もゆゝしけれ。

それより本社にまうづ。まことはこれが吉田の社にて、神祇官は吉田の何が
しがあづかり給へるなるを、今は神祇官を本社のごとく人にもいひ、人もさい
ひて、本社の御ことはよしだの春日といひて、よそ／＼しくいふもかたはらい
たしや。

『式』に見えたる霹靂神社にもまうで【付箋「霹靂神社」は神祇式にみえた
れど、神名帳になし。おそらくは卜部家加筆にはあらざるか。『三代実録』な
どにその例あれば、はかりがたし。猶ひろく可考。^(幸) 伊本など】、それ

より下鴨の御社にまうでむと、畑の中を堤にいで、かも川のながれにそひつ、
堤をや、のぼれば鳥居あり。入てしばしゆきたる左のかたに、『式』に見えた
る川合神社おはします。このあたりに榊の連理あるは、いとめづらし。

楼門を入てかたへをながるゝ、糸川に口そゝぎ、手あらひて、御社の大前ちか
くをがみ奉るも、おほけなくかしこし。今も二座おはしまして、大きくめでた
き御社のさま、いとかんさびたり。

ながれてもたえぬみすゑはかもがはやそのみな神のまもりますらむ
とたのもしくかたじけなし。

宝殿をはじめ、すべての官舎もゆゑ／＼しくつくられたり。井於神社にまう
で、柀の社にもまうづ。こはいとあやしき神にて、ねぎごとのかへりまうしに
何の木にても奉りてうゝれば、ほどなくひゝらぎになりかはるとぞ。さるゆゑ
にや、御前にひゝらぎいとおほし。

ほこならぬ神のみまへのひゝらぎも木だちやひろにおひさかえけり

この御社の左のかたにゆけば、こゝにも鳥居たてり。そのほとりに石の灯笼
のあるに、「日本第一皇大神宮」と彫付たるは、かたはらいたしや。今のよの

神主は、すべてく古学にうとければ、かゝることをしるして、いとよきこと、おもひをるこそ、をかしけれ。

これよりいとほそき道にかゝりて、一里ばかりもゆきて上鴨にいたる。社家町といふ町を出はなれたる所に、『式』に見えたる太田神社おはします。今は上鴨の撰社になり給へり。

この御前を左にゆけば鳥居ありて、いとひろき野なり。こは五月の節句に競馬をする所なりとぞ。

御手洗川に例の手口きよめて楼門を入れて、大前ちかくをがみ奉る。いといかめしき御社のさま、山のたゝまひもこと所にはにずかうくしく、たふとさいはんかたなし。

紅葉のあるをみて、

にぬり矢のそのかみ山もしのばれてる色あかき木々のもみぢ葉

それより今宮のかたにもものせむとす。もとし道を鳥居のあたりまでかへりて、それより左のかたにをれて、八丁ばかりゆきたる所に大宮の社といふおはします。里人のいふには、祭神は猿田彦大神にて、この大神のあまくだりたまひて加茂大神をまち給ふほどに、千年をへたりければ、「まつはうきもの」との給ひけるより、今にこの社に松はなしとぞ。例のうきたることながら、まつの木のみなきこそあやしけれ。

今宮の御社は、今も大きな御社也。こは『式』に見えたる御社ならねど、一条天皇の時代にこの所にまつり給へること、史にもみえたる御社なれば、たふとし。今はあらぶる心もましますで、花の都をまもり給へることよと、たのもしくなむ。

大徳寺にもまうで、船岡山のほとりをゆくほど、紅葉の一木みえければ、

山ちかくこがるゝ色はめにたちて船をかしぐもみゆるもみぢ葉

鹿苑寺にもものして、むかし足利義満のたてられたる金閣にもほりて見るに、庭の池、築山などのけしきおもしろし。衣笠山も手にとるばかりちかくみゆ。こは山のかぎりみな松ばかりしげりたり。

よそめにはまつかさねきしこ、ちしてなべてみどりのきぬがさのやま

平野神社は今も四座おはしまして、これも大きな御社なり。

たひらけくたひらの宮をまもりてや君がよはしらこ、にますらむ

紙屋川といふは鳥居のほとりをながるゝ川なり。その川をわたりて北野の天

神の御社にまうづ。いとうるはしくつくりみが、れたれば、めさむるばかりたふとし。

大神も今は都にすみまして心つくしもなほやなからむ

この御社はまうづる人もおほくにぎはし。これよりは町つぎなれど、道いと、ほければ、日もくるゝ頃、宿にかへりぬ。

九月十二日

十二日。けふは西山のかたにもせんとなつ木嶋の御社にまうづ。木ぶかきもりにて泉あり。そのなかにはしらは六角にて、三つをひとつして三角なる鳥居あり。いかなるゆゑにかいぶかし。今は元糺といふなり。

紅葉のあるを見て、

立よりて見るもえならず木嶋やなみくならぬ木々のもみぢ葉

こゝよりほそき道を十八丁ばかりゆきて、梅宮にまうづ。今は四座相殿におはします。

むかしより今もこはに宮ばしらたち花氏の神ぞこの神

梅津川を船にてわたる。むかひのきしより五丁ばかりゆけば、松尾神社おはします。大きな御社にて、うしろには別当の峰といふ山ありて、かうくしく物さびたる所なり。

月読神社は一丁ばかり西の方におはします。これにもまうで、左の山にそひていとほそき道を北のかたに出はなれたる所は、渡月橋のほとり也。このちかきあたりに『式』に見えたる櫛谷神社おはします。まうづる人もなきにや、道もなきまでさゝなどおひしげりたり。

法輪寺にもまうで、かの橋をむかひの岸にわたりてみわたしたるさまよ、おとにきく嵐山の紅葉いとおほく色づきて、松の木立さへこと所には似ず、いとおかし。小倉の山もいとちかくみゆ。すべて川のながれゆたかに、山のさまなどもよにはことなるけしきなり。

ひとしほは松にもはえて又たぐひあらしの山の木々のもみぢ葉

名にしおふ山のあらしのたらぬまにもみぢのにしきけふぞきてみる

あらしてふなき山の名もいとはれずけしきことなる木々のもみぢに

桜の木どものもみぢしたるもおかし。これを見るにつけても、花のをりはいかにとおもひやられて、

まだ見ぬもこれやうきよのさがの山春のさくらの花のさかりをしらぬこそ口をしけれ。

となせの滝などをも見て、しばし心とゞめあるほど、筏師のくだしくるさまいとめづらし。川上の紅葉のさまいかならんとゆかしければ、「やよやまて」とぞいはまほしき。

天龍寺・清涼寺などにもまうで、野宮の跡をたづね見るに、黒木の鳥居をたて、藪の中にあり。所のさまもふるくはあらず。ことに毘沙門の祠をたてそへたれば、後人の例のしわざなるべし。まことの野宮の跡に仏神の祠のあるべしやは。

それより太秦の広隆寺にまうづ。この寺の内に大辟神社おはします。さて、こよひはこの寺にふるくよりつたはりたる牛祭のありときけば、寺の前なる家にやすみて日のくる、をまつになむ。

戌の刻すぐるころほひにぞ、かの祭ははじまりぬ。こはかの大酒神社のまつりにて、法師の五人しておこなふ也。ひとり女のかたしたるめんをきて、幣をもちて牛にのり、四人は鬼のかたしたるめんをきて、鉾をもちてその牛をかこみて、寺のうちを一度めぐりつ、かねてかぎりある檀のうへのほりて祭文をよむ也けり。その祭文はいとけしからぬことゞもをいひつらねて、けうあり。すべてこの祭のさま、ふるく神さびたる行事にて、法師どものしわざとはみえず、めづらしき見ものなり。かの祭文をきく人どもは、けうある文にめで、こぞりわらふも、神のみこ、ろにはかなひなかし。

うしまつり今も残りてうづまさやまさやかにみるいにしへのあと
神事もはてぬればかへらんとするに、なれぬ道をよるかよふこそ、わびしけれ。亥の刻すぐるほど宿にはかへりぬ。

九月十三日

十三日。けふは雨ふれば、ちかきあたりにものせんとて、南禅寺・真如堂・永観堂・銀閣寺などにもものす。

永観堂にて見かへり本尊といふを見て、
おほけなきこのおほてらに常すみて身はかへりみぬ仏になり
おなじ所のもみぢを、

むなしとはときてもさすが色にあかで紅葉見かへる仏なるらん

こよひは名だ、る月もくもりて見えねば、
見れば又友のまとるもおもひ出むくもるもよしや長月のかげ

九月十四日

十四日。雨ふる。

けふはちかきあたりにものす。知恩院・長楽寺・双林寺・霊山などにものす。さしたることもなき所々なれど、いづこもくおほどかにおかしくみゆるは、げに都のことなりかし。

長楽寺の紅葉を見て、

そむるよりちりゆくまでを寺の名のながくたのしくすむ人やみむ
双林寺の紅葉を見て、
寺の名もよにあらはれて色ふかくならぶ林はもみぢしにけり

おなじ所に菊の下水といふがあるをみて、
千とせすむその名はとほくながれきて今よまでもきくの下水

九月十五日

十五日。けふも雨ふる。

ひるつかたより天気よくなりぬれば、祇園の御社にまうで、
大神のその言の葉もおもひいで、へだてしよ、をしのぶやへ垣

この御社はまうづる人のいとにぎは、しくて、ちかきあたりの今めかしきあそびどもの、おのがさまくくにうるはしくとりよそひてまうづるをみるも、田舎びたるめにはめづらしくなむ。

それより安井の金毘羅の御社にまうづる。いとかしこし。

浜千鳥あとをみやこにとゞめむと松山よりやうつりましけむ

清水にもものせんとてゆく道のほとりに、八坂の塔とて塔ばかりあり。こはむかし大きな寺のありけるなごりなりとぞ。

ひろくのみありしむかしにかはらぶきあら、ぎばかり今はのこりて

清水の観音はまうで、をがむ人のおほければ、我もをがむ。舞台といふよりみわたしたるけしき、いとよし。音羽の滝といふもあり。堂のうしろに地主権現の御社といふおはします。こはこのあたりしろしめす神なりとぞ。

それより大仏にまうづ。今はむかしのいらかどものあともなく、すぎつると

しの火のためにやけて、本堂の跡などは、たゞ野原のごとくあれにあって、す、きなどのおひしげりたるさまなどを見るに、かゞづらはぬ仏所のことながらも、さすがにあはれなり。

新日吉社にまうづ。こは何がしの君をまつりたる社なりとぞ。

から国をことむけまし、大神のいさをはよ、にくちせざらまし

耳塚をみて、むかしをおもひ出てよめる長歌。

あづさ弓 今の世までに 豊国の 神とも神と きこえくる 君がみいつ
は かけまくも あやにかしこし いはまくも あやにかしこし まつろ
はぬ 国をことむけ あらぶる 人をもやはし かりこもの みだれし国
を 安国と をさめ給ひて いやひろく みいつふるはし 帯姫 神の命
の から国を ことむけまし、 古の 例のごとく から国も ことむけ
せむと 御軍を あともひたまひ 大御言 おほせ給へば 臣たちは 御
言かしこみ 益男の 心ふりおこし 山行ば 草むすかばね 海ゆかば
みづくかばね かへり見は せじとことだて 吹風も おほにはふかず
たつ波も のどにはたぬ あら海の 神のわたりを 大船に 真梶し、
ぬき はろぐに こぎたみわたり 唐国に いゆきいたれば から人も
まけてはあらじと 千万の 軍をおこし まつろはず たちむかひしも
神国の 人のちからに かちもえず た、かひかねて 露霜の 消うせぬ
れば まつろはぬ 王ことむけ まつろはぬ 国をことむけ ことあげせ
ず た、かひかちぬ かちすさび すさびのまにま きりはふり はふり
しからを 大船に つみかへらむと むらぎもの 心はもへど からおほ
み つみもあへねば その耳を いたりもち来て 長き代の するしにせ
むと 遠き代の かたりにせむと その耳を こ、にかくして つくりお
ける これのみ、塚 いにしへに わたりまるこし から人も このつか
見つ、 かしこみて ねにもなきぬと 今までに いひつき、たれ この
つかを まさめに見れば 敷島の 山路の外の ことさやぐ からの国ま
で 月日なす 光かゞやき ふるはし、 君がみいつの おもほゆらくも

反歌

豊国の神のみいつは今のよにおどろくばかりあやにかしこし
いにしへもたぐひすくなしことさやぐからの国までことむけし君
いさましき君がしわざをから人もき、おぢしけるこれのみ、塚

九月十六日

十六日。泉涌寺にまうづ。こはきのふものすべかりしを、日くれてえゆかざりしかば、けふことさらにまうづる也。この寺は深草の里より東のかたに七八丁ゆきて惣門あり。こ、は仏所ながらも、さすがにたふとし。

さて、陵どもを、がみ奉ることはゆるさねば、かくし奉りたる山といふをよそながらをがみ奉るなり。今は十三重の塔といふものをしるしにたてたりとぞ。まことや、ちかき世となりては、この寺にかくし奉る御令となりたること、いとなげかはしきことながら、かくいやしき身にてともかく申奉るはかしこけれど、

いにしへのみわざも今は山つくりなきみさ、ぎをみるぞかなしき

もる人ものさきもたえてみさ、ぎの寺にますこそかなしかりけれ

現神かしこき君がみさ、ぎを今は法師がもるがかなしき
をりしもにはかに空かきくもりてしぐれきたるは、ところがらいとあはれなり。

袖ぬれてむかしをしのおこ、ろとは空にもしりてふるしぐれかな
いにしへを空もしのぶかまる来つる袖よりほかにしぐれ来にけり

九月十七日

十七日。けふは賁船・鞍馬のかたにものせんとて、朝とくよりいづ。

みぞろ池村といふをすぎて、市原にいたる。こ、に小町の墓といふあれど、例のうけがたし。おなじりに大原神社といふおはします。それより二の瀬といふにいたる。こ、まで都より三里とかや。

道いととほきに、けふは空うちくもりて、をりく時雨のふりくるに、北山風さへこよなく身にしみてかゝるを、何にきつらんとまでいとわびし。空はくもりながらもこのあたりにて雨はやみつれば、百姓の家に入てものなどくふ。この家のまへはやがてくらまときぶねにゆく追分也。

くらまのかたよりさきにゆくかた道のたよりよしときけば、まづくらまのかたにもす。惣門といふにいたりてそを入れて、すこしのぼる所に本堂あり、をがむ。靱大明神といふもおはしますは、いかなる神にか。こ、もすぎし年、火の為にやけて、今はかりの堂なりとぞ。

三丁ばかりのほれば、もとの本堂の跡なりとて、石ずゑのこりたり。こ、は

いとたかくうちはれたる所にて、都をはじめ比良嶽・淀川・八幡山のあたりまで、いとよく見ゆ。比叡の山はたゞむかひにみえたり。

そこかしこの谷あひに色よき紅葉どもいとおほし。むかしは此山に紅葉おほかりしを、ちかきとしころはたえたりとき、しかども、なみく／＼の色にはあらねば、

たゞにやはすぎの木間に色はえてあかぬくらの山のもみぢ葉

色あかくそむるを見れば山の名もしらぬくらの木々のもみぢ葉

つゞらをりのほりし道はとほけれどちかくふもとのもみぢをぞみる

又五丁ばかりもゆけば奥院といふあり。兵法場といひて石のおほくある所もあり。こは義経の古ごとをいひつたへたり。かゝるすぢは心もとまらねば、よそにみずぐしぬ。

貴船のかたにゆくには、こゝより西のかたなる、いとほそき道をひたくだりにくだるなりけり。くだりはてたる所に橋ありてわたる。こは貴船川にて、むかひはやがて貴船のさとなり。こゝにて又もしぐれのふりきぬれば、賤が家にしばしやすみてはる、をまつほどひさしきに、猶やまねば、まづ御社にまうでむと、川にそひて三丁ばかりもゆくかたへの山のもみぢ、いとおもしろくそめわたして、くらまの山よりはひとしほまさりざまなり。

貴船川玉ちる水に影みえておもひの色をうつすもみぢ葉

名のみして船はかよはぬ山川におのれこがる、きしのもみぢ葉

ほそき道をゆきく／＼て、まづ奥院といふにまうづ。木ぶかき深山のさま、いとかうぐし。

五丁ばかりかへりたる所に本社といふはおはします。こは今一きは大きな御社也。『式』にみえたるはいづれならむ、まうづる人はひとりだにみえず。げにかゝる山中のことなれば、おのがやうにいにしへをしのお、よのなかのひがものならではまうでねば、かゝるもうべなりけり。

この宮にまうでむものと道とほきぶねの神よあはれとは見よ
雨は猶やまず、いとわびしければ、かしこけれど、

白き馬たてまつらねどふる雨をしばしやめてよこれのおほかみ
かくて、くれかゝるほど宿にはかへりぬ。

九月十八日

十八日。けふは高雄の紅葉見にもせむとて、朝とく宿りをいづ。

まづ仁和寺をはじめ、梅尾寺・楨尾寺にまうで、高雄にいたる。清滝川のながれいといさぎよく、むかひなる山はやがて高雄山にて、紅葉いとおほく、川のきしにはことにおほきなる木どもありて、えもいはずそめわたしたり。その河にのぞめる茶屋に入てものなどくひつ、それより橋をわたりて寺にまうでむとする道のかたはらにも紅葉いとおほし。

さて、門を入たる寺の庭にも、猶こゝかしこ紅葉の見ゆるさま、世の常とはやうかはりて、げに紅葉の数かぎりもなき所なり。

むかしより紅葉の名こそたかを山げにことわりと見てぞしりぬる

高雄山紅葉のにしききてかへり故郷人に見せまほしさよ

紅葉見る猶こそきぬれ高雄寺仏たのまぬ身にはあれども

かへるさ広沢のかたにものして、かの名だゝる池を見て、

さゝ波の名にたつ月もよるならば見てましものをひろさはの池
こよひ人にいざなはれて祇園町の楼にのぼりぬ。盃のかずかさなるほど、酒のむしろにあそびども三人よたりいできて、「みさかなは何よけん」などいひはやしつ、さゝやかなる手してはさみなどするさま、いみじく心にくしや。三の緒のしらべ花やかに、今めかしきうたどもうるはしくひきいづる声には、ほとく心もうきたつまゝに、

きよくのみみゆるよそひに心をかけてぞうつすかも川なみ

ひきいづるくしげの中の三の緒にあくるもしらで心うかれつ

とだみたる声してうたはまほしくおほゆれど、さすがにうしろめたくて、口のうちにのみひとりごたるゝも、いといぶせしや。

九月十九日

十九日。朝とく二条わたりの人にいざなはれて、修学院の行宮ををがみにもす。こは山ばなといふ所のちかきあたり、修学寺村といふ村の山にありて、やがて比叡山のふもとなり。

そもくこの行宮は、後水尾天皇の代々の行宮の為にとて、たておき給へりとなむ。かるがゆゑに靈元太上天皇は享保といふところ、たび／＼御幸もありけるを、そのとしの十六年といふとしよりたえて、その後は御幸もなく、こたびまではおよそ九十四年にもなりぬ。されば、こたびのまうけにとて、年月もちりつもれる木々の葉をはき、よめ、おひしげりたる草などをかりはらひ、

あるは行宮のくちそこなはれたるをつくりかへなどせんためにとて、修理職より役民をおほくいれらるれば、伝をもとめてその役民のすがたになりて、箒をもちて修理職といふ印をおしたる札をこしにつけて、行宮の御門に入るなりけり。

いとかしこけれど、そこかしこ見めぐるに、行宮は二所ありて、何とかやからめかしき名をつけられたり。山のた、ずまひおほどかに、紅葉いとおほくそめわたし、前には大きな池ありて、山よりおつる滝のながれ入るさま、中島の松のけしき、こたびあたらしくつくられたる石ばしのさまなど、いともしろし。さばかり高き所ならねど、東より南まではものもさはらずよくみわたされて、都の家居どもの手にとるばかりみゆるのみならず、よもの山々たゞこ、もとにみゆるさま、とりくくめでたき行宮のさま、絵にかくとも筆およぶまじうおもはれて、えもいはずよにすぐれたる所のさま也。げに後水尾天皇の代々の行宮のためにとさだめ給へりしは、うべなること、しのび奉らるゝも、いとかしこし。

年ひさしくたえたる御幸の、ふた、びあることをよるこびてよめる長歌。

春山の 花はあれども 秋山の 紅葉うましと 天皇の 大御心に かしこくも おもほしめせか 青きをば おきてはなげき あかきをば とりしぬばむと さにつらふ 紅葉しみたつ あきもよし 北の山辺に 外宮を さだめ給へれ 北山の そのとつ宮に 秋毎に みゆきありしを 世の中は 常なきものと いでましたの たえてすたれて 外宮は くちそこなはれ 御庭には 芝草しげり こ、だくの としもへぬるを あたら代と 今年の秋は 大御幸 おもひた、せれ そこをしも あやにかしこみを さめつくる 官人はし とつ宮を つくりかへよと 御庭なる 芝草かれと 御民らに よさし給へば さばへなす さわぐ御民は 家わすれ 身もたなしらず かしこみて つかへまつれり あづさ弓 今より後は つきの木の いやつぎくくに 万代に いでましあらむ これぞ此宮

反歌

神さびてありし外宮つくりかへ君がいでましあるがかしこさ

みじかうた

大君のかざしのためと山つみもまつるみつきのみぢなるらん
こ、ろあれや君が御ゆきをまぢがほにそむるもふかき山のみぢ葉

この山の滝のしらいと千代かけてながくたへせじいでましのみや
かしこきや君がみいつにあしひきの山もつかへてみそのとなりぬ
靈元太上天皇のめで給ひつる木なりとて、行宮のまへにゆゑゆゑしくかきゆひめぐらしたる紅葉一本あり。こは御製の紅葉といふとぞ。

大君の恵の露をかけそへてげにもことなるもみぢなるらん

言の葉もそめて見まし、いにしへをのこるもみぢにしのおかしこさ

かばかりたふとき行宮ををがみ奉りたること、たふとくもうれしくこそ。

それよりちかきあたりのことなれば、赤山明神にまうづ。こはいかなる神にか、ふるくものにみえぬ御社なれば、しるよしなし。

もみぢを見て、

色ふかくそむる木末に宮の名もあかくしらるゝ山のもみぢ葉

九月二十日

廿日。けふはくれすぐるほどより、加茂川の堤、柳茶屋といふにもす。こは此所にて一夜をあかして、あすの御幸ををがみ奉らむとてなり。この前には、こたびあらたにつくられたる橋あり。

さて、こよひよりかくこの所にやどりあたるよしは、こたび御幸ある道の外の道には、すべて竹垣をつくりめぐらして、こよひの夜中ばかりより人を制して、竹がきを入ることをゆるさねばなりけり。

さて、このあたり吉田をはじめ、真如堂・永観堂・黒谷、あるは比枝・くらまなどにも、今宵より人を制してまゐのぼることをゆるさず。こは御幸をみおろすことをかしこみてなりとぞ。いとひさしくたえたる御幸を、こたびあらたにはじめ給へるなれば、すべてくいかめしくおきてらるゝこそ、たふとけれ。さて、こよひ此所に一夜をあかして、つくくおもへば、はるくくとほき国よりをがみにのぼりきたるみゆきも、あすのあしたのことなれば、よもねられぬばかりうれしともうれし。

九月二十一日

廿一日。あけはなる、頃、橋のほとりの芝生のうへにいでてうづくまり居つ、待あたるほど、や、ありて辰の刻ばかり、みさきおふ声きこえて御幸はあり。御供につかへ給ふ大宮人たちの、狩衣・直衣などおもひくくにうるはしく

きよそひ給ふ袖どものさま／＼なるも、いとめざまし。ことに御輿をほどこかくをがみ奉るこそ、たとへむかたなくたふとけれ。

さて、この御幸のさま、くわしくするさまほしけれど、めでたしとも、かしこしとも、かたじけなしとも詞にはのべがたければ、みじかき筆にはかきとりがたくなむ。たゞ百がひとつをのべたる長歌。

かけまくは あやにかしこし いはまくも ゆゝしきかも ひさかたの
天津日嗣を おり居ます おほすめら命 手むだきて ゆたけくませば
たひらけく ことなくませば 大宮の そともの遠の しげ山と しみさ
びたてる 北山の もみづを見むと 神ながら おもほしめして この年
の この長月の はつかより けふの足日に 大御幸 おもひた、せれ
大御輿 道もてるかに 九重の 外重を出て 行宮を さしてゆきます
大御先 つかへまつると 刺竹の 大宮人は 馬なべて 御さきにた、
し 大御供 つかへまつると かきかぞふ 百の官は つらなみて みと
もにた、し 狩衣も 直衣の袖も うるはしき けふの御ゆきを 風の
音の 遠きにきゝて 天さかる ひなの国へゆ かしこみと のぼりまる
きて 道の辺の 芝生のうえに 麻目物 いはひをろがみ 我はもよ そ
こにおもはく 天皇の 大御幸はし 年久に たえけるものを 遠御代の
跡をたづねて いにしへに 又たちかへる ことよろしき

反歌

秋山のもみづを見にといでましの大御幸をしみらくしよしも
御民我いけるしるしありけふの此大御幸にしあへらくおもへば
みじかうた
北山やけふのみゆきのうれしさを紅葉も色にいでてみすらむ
年かさねふりし御幸の跡とめてむかしにかへる袖のいろく
大御幸をがみてけふは廿日あまり一かたならずかしこかりけり

九月二十二日

廿二日。このころ若山の太平翁の錦小路に来る給へるよしき、つれば、旅居をとぶらひたるに、けふは故大人の影前会をその旅居にてもよほさる、よしにて、大坂の一柳春門、備中の藤井高尚をはじめ、なにがしくれがしおよそ廿人ばかりあつまり居たり。

兼題は「名所紅葉」なりとき、て、取あへず。

清滝や水のみどりも色かへてうつる高雄の山のみぢ葉

秋は又黒うしがたも名のみしてくれなゐにほふ浦のみぢ葉

皆人にこれもめでよとすゞか川八十瀬にうつるきしのみぢ葉

探題「忍恋」

つゝまる、かぎりは袖にしのびなむせきはつまじき涙なりとも
その人も猶こそしらね誰ゆゑといはぬなみだのしのぶもぢずり
人々のもあれど、そはもらしぬ。
こよひはまことにおもひかけなき円居なれば、いとけうありて、何くれとものがたりなどしつゝ、夜ふけて宿にかへりぬ。

九月二十三日

廿三日。あすは都をたゝんとすれば、朝とくよりそのまふけに荷の緒ゆひかためなどして、日頃たづねかはしたる人々のもとにも、あすかへるべきよしをつげにもす。されば、いとまなく、心あはたゞしくなむ。

九月二十四日

廿四日。朝とく日ごろ宿居たる三条の旅居をたちいづるに、十日あまりもなれぬることなれば、別のさすがにたゞならず。
たちいづる袖のなみだも玉しきの都わかる、ことぞかなしき
なれにける日数おもへば家ならぬ旅居もさすがたちうかりけり
建仁寺町といふをゆくほど、日頃見なれつる東山のけしき、何となくあらぬこゝちのせられて、すぎがてにかへりみらる、もいとあやし。かのむかし「宇泥畔はや」といひて別ををしみけむ古ことさへおもひあはされて、あだし国人のこゝろながらも、いとあはれにおぼゆるは、をりにふれたる心のすさみなりかし。

十八丁ばかりゆきて東福寺にもす。この寺の庭に通天橋といふはしありて、そのほとりに名だゝる紅葉有。げにそめわたしたるけしき、いみじくおかし。

朝日さす空にかよひてはしちかくてりこそわたれ木々のもみぢ葉

又六丁ゆきて稲荷の社にもまうづ。今は三座相殿にませり。

稲荷山いのねがひをうけもちの神ときくにもたのもしきかな

さて、この御社におはします三種の大神たちは、いともたふとき大神なるを、今のように稲荷とだにいへば、狐のこと、なりぬるこそ心えね。狐をまつりたる社はこの御社の末社にて、命婦の社といひて本社のうしろのかたにありて、狐は天神の御使はしめといひつたへたり。このけぢめをあまねくしりたる人のなきゆゑに、狐をまつりたる社のことを正一位稲荷大明神といづくにてもくおしなべていふは、ことに心得がたし。正一位の御位は、天慶三年といふとし、三柱の大神にさづけ給へる御位なるをや。

又本社のうしろのかたに太師堂とて、空海のかたをおきたる堂あり。これをおきたるよしは、むかし空海が東寺の門にて稲をになひたる翁にあひて、それを稲荷の大神なりといひたることのあればなるべし。こはいともうきたることなれば、稲荷山といふよりのしひごとにて、例の後のよの法師らが、おのが宗をたふときものにせむためのつくりわざなること、うたがひなし。さばかりたぐみなりし空海が、かくつたなきあさはかなる偽を、よもいひいでまじくおもはるれば也。そはとまれかくまれ、そのつたへをまこととして、この堂をこ、にはいかなるおろかなる人のたてたりけむ。いとかたはらいたくこそ。

廿六丁ゆけば、藤杜なり。御社にもまうで、それより宇治のかたにもせんとす。山道といふをすぎて、木幡のさとなり。

誰をおもふとなき旅路なれば、

かちよりとゆく道くるし山城のこはたのさとに馬あらばかせ

とぞいはまほしき。このさとに柳大明神といふおはします。『式』にみえたる御社にはあらじか。

歌芝・岡田（註）といふをすぎて、大和田村といふにいたる。こ、に萬福寺といふ寺有。こは黄檗宗といふ宗の水上にて、いと大きな寺なり。堂門の柱ごとに唐の言葉どもかきつらね、すべて門のたてざままで、いみじうからめかしたり。こはよの常にかはりて、中々にこちたくもみえず、めづらしくおぼゆ。

こ、より宇治にはちかければ、ほどなく川つらのさとにいづ。こ、を彼方町（註）といへば、『式』にみえたる御社はいづれにかと、へど、例のしりたる人もなし。離宮八幡といふ、よきほどの御社おはします。いにしへの名ありける御社ども、今の世はおほかた八幡・天神などになりたまへるがおほければ、これやそならんかとおもへど、ある説に、この離宮といふは、藤原忠文をまつりたりといへば、彼方神社にはあらざるか。さだめがたし。

興聖寺にまうづ。この寺のうしろの山を朝日山とはいふなりけり。恵心院にものして、かのおとにき、わたりたるはしのほとりにいづ。わたればむかひに橋姫の社あり。このあたりよりみわたしたるけしきよ、むかしよりいみじくひきたるもしるく、いとおもしろきところ也。

あじろ木のなみにはあらぬけしきにもあかずいざよふうぢの川つら

みるにけふあはれとぞおもふ音にのみき、て年へしうぢの川はし

薫君のふるごとなども折からおもひいでられて、なつかしくおぼゆるは、いとあやし。

跡もなきそのいつはりもながれてはおもかげうかぶうぢの川みづ

音にき、つるあじろ木はみえねば、

秋ふかくうぢの川霧た、ねどもあらはれみゆるあじろ木もなし

こは何がしの僧の願によりて、かくたえたりとか。そのことしるしたる石ぶみもありとかや。いにしへよりさばかり名だかりつるあじろなりしものを、仏わざになづみてたやしたる僧こそ心づきなく、つたなきものとおもはるれ。

平等院にもす。堂などのたてさまいと古く、ことなり。合戦のことなどおもひいでられて、

もの、ふの駒うちいれし跡ふりて波もさわがぬうぢの川つら

駒にのりたゞにわたりしもの、ふの八十氏川のむかしをぞおもふ

扇の芝といふがあるは、頼政ぬしのうち死し給へる所なりとぞ。いとあはれにおぼゆるまゝに、

たぐひなき言葉の花をのこしおきて身はうもれ木とくちし君かな

縣明神といふにまうづ。こは左府頼長公をまつりたりとかや。いともかしこき神なりとぞ。

さて、こよひはこのさとにやどりすべきを、いまだ申の刻ばかりなれば、八幡までゆくかたよかむなりとて、このさとを出はなれんとす。

かゝる名所のことなれば、

いそがずは一よは宿をかりいほに尾花かりふきねなましものを

といとなごりをしくこそ。

夕風さむくすゞろ身にしみければ、

さとの名をわが身にしれどうきたびの袂さむけく秋風やふく

こ、より八幡までは百丁ありて、家だにもなき畑道、あるは田のくろをゆけ

どくはてなくて、道いとほし。日もくれずぐるころ、からうじて八幡のさ
とにつきぬ。こゝに畳や何がしといふものゝ、家にやどりぬ。

九月二十五日

廿五日。朝とく宿りをいでて、安居橋といふをわたる。こは八月の十五日に
放生会をおこなはるゝ放生川といふにかけたる橋也。はしのむかひに放生亭・
疫神堂・高良社・極楽寺などいふ有。

さて、鳥居を入て坂を五六町ばかりものほれば、又鳥居有。それを入て御社
にまうづ。たふとさたとしへなく、ふるごとなどもおもひいでられて、

まもらむと神もみこゝろつくしより都にちかくうつりましけむ

石清水ふかきちぎりにうつりきて今にすみますひろはたの神

松ならでうつりし神も石清水ちとせかはらぬ宮ありけり

かずならぬ身にもいのらん男山まもるめぐみのひろはたの神

御門のほとりに鳩どものおほく居て人をもおそれず、手にものをいれてくは
すれば、むらがりくるは、めづらし。

この御門より半丁ばかりゆきて左にほそき道あり。この道をすこしゆけば、
ひろき山路にいで、十八丁といふに橋本の宿にいたる。こゝより船して山崎
にわたつて、離宮八幡の御社にまうづ。

広はたの神の御前にぬかづきて山さきくとや身をいのらまし

よど川は中にあれどもまもりませ恵へだてずいます大神

又橋本にかへりて、人やどす家に立よりてものなとくひつゝ、大坂にかよふ
船にのる。こゝより八里なりとぞ。

すみがたきよどの川舟よとゝもにうきてこゝろのゆくよしもがな

この船路には水無瀬をはじめ、鳥飼などふるくものにみえたる所々あれば、
船路ながらそれをも見むとおもひ居たるに、けさとおきたるけにや、ねむり
いできて、おもはず五里ばかりがほどもまどろみぬ。ふとめざめて舟人とへ
ば、かの所々は過来つるよしいふ。くちをしけれど、せんかたなし。

それより三里はめにもとまらぬ船路をゆくほどさ、やかなる舟にのりて酒・
餅などをうるものは、この船にのりたる人々にそのものをうらむとて、よぶ声
いとなめげなり。されどがむる人もなくて、よの常にようかはりて、中々に
おかしなどいふは、げにめづらしきをこのむよ人のくせなりかし。

くれずぐるほど船はてゝ、大坂につきぬ。道頓堀といふところ、河内屋何がし
といふものゝ、宿にやどりぬ。

九月二十六日

廿六日。坐摩の御社にまうづ。この御社を今は「さま」といへども、文字は
おなじことなれば、さすがにむかしのなごりの残れるこそ、たふとけれ。今の
よは神社の御名、あるは所の名など、ともすればからもじによびなせるは、後
のよ人のからめかしていふをよきことゝのみおもひたがへたるよりのことにて、
いともなげかはしきことぞかし。

それより広田明神・蛭子宮などにもまうでゝ、住吉にまうづ。今も四座おは
しまして、いとも大きな御社也。御社はいづれもしむきにたゝして、筑紫
のはてよりから国かけてゆきかふ船をみそなはして、まもりおはします。こは
神の御心にもさぞかなふらんと、かしこし。

大船のゆきかふ見むとみこゝろにおもひてこゝにすみの江の神

ぬなくらの長峽の岬のながくのみいましてこゝに住の吉のかみ

ふねのへのいはつるきはみこの神にいのらぬ人はあらじとぞおもふ

海のほとりにいでゝみるに、武庫山・淡路島などみえて、けしきよし。

住の江の津にたち見れば玉ちはふむこ山もみゆあはぢしまみゆ

きしの姫松といふもあり。こは「いくよへぬらん」といふ歌によりて、例の
つくりたることなるべけれど、ふとおもひいづるまゝに、

われ見てもといひしむかしの言の葉もひさしく成ぬきしのひめ松

かへるさ天王寺にまうでゝ、生玉社にもまうづ。こはふるく「生國玉比売神
社」と見えたるなるべし。御社のさまはよきほどなれど、木立おほからずみゆ。
この宮のうすき木立に天皇のきり給ひけむむかしをぞおもふ
仁徳天皇の御社にもまうでゝ、夕つかた宿にかへりぬ。

九月二十七日

廿七日。芝居といふもの見にもしぬ。

九月二十八日

廿八日。けふもおなじもの見にもす。かくふた日まで見にもするは、こ

の芝居といふものを、おのがさとしていたくこのめばなり。

いともおもしろくおほゆるまゝによめるながうた。

石上 ふるき時より つたへこし 舞にはあらず あしかきの ちかきとしごろ つくりいでて 世にはびこりし 芝居とふ その俳優は くすしくも つくれるものか かぶきとふ その俳優は あやしくも つくれるものか いにしへに ありけることも 今のよに あることども、 こともまくら たかきことをも しつたまき いやしきことも うれしきも よろこばしきも かなしきも うきもつらきも まさめにし たゞみるごとくよのなかに ありとあること ことごとくに ひとつもおちず 人ごとを まねびつくれ、 そのわざを うちみる時は つくりたる こと、しれ、ど まことかと おもひまどはひ うれしきを まねぶを見ては 見る人も 心うれしみ かなしきを まねぶを見ては みる人も 涙ながして をそやとは おもふものから そのことを みけんがごとく そのことを き、けむごとく あやしくも こゝろうつしぬ このわざを めでぬ人なく よのひとの めでにめづれば 天の下 くぬちことごとく このわざの ほびこる中に 玉しきの 都はあれど 鳥が鳴 東はあれど あしがちる 難波のさとは いやさかえ さかえにさかえ 人さには 来入 見るがね ひろらなる 家をつくりて めもあやに おどろかれけり あはれ此わざ

九月二十九日

廿九日。大坂を立いでんとす。

朝とく宿りをいで、玉造といふ所にいたる。

ところえぬものとしもなし玉つくりこの里の名にのこるおもへば

深江といふをすぎて、若江にいたる。こゝに神功皇后の御社といふおほします。こは『式』に見えたる鏡神社なるべし。織部・福万寺・尾崎(天位)などいふを過ぎて、神館(神)といふにいたる。こゝまで三里なりとぞ。

こゝより坂路にかゝるは、たつた山也。今は龍田越とも十三峠越ともいふ。いとほき坂路をのぼりくだりて、申の時すぐるほど、こしき塚といふ所にいたる。こゝより龍田までは三十丁ありとぞ。

しばしゆきて龍田川のほとりにいづ。流にそひてゆくに、川のほとりこなた

のきしにもあなたにも紅葉とおほし。歌によみたる紅葉とは所たがへれど、数かぎりもなく木どものあるは、龍田の大神の神木にて、願をかけたるかへり申にはすべて紅葉を奉りて、このきしにうゝるなりとぞ。

風まもる神のしめす木々なればちることしらぬもみぢならまし

龍田のさとにいたりて、川合やながしといふもの、家にやどりぬ。

九月三十日

三十日。やどりをいでて五丁ばかりゆけば、左のかたに龍田神社おほします。影宮といひて、『式』に見えたるにはあらず、後の世にこゝにはひまつりたるなり。まことの立野村といふにおはすとぞ。たふときみやしろのことなれば、まうでまほしけれど、一里ばかりありときけば、えまうでず。

十六丁といふに法隆寺なり。先、山門を入れて金堂・本堂をはじめ、何くれの堂、いらかどもをみめぐりて、又もとの山門を出たる所に太子堂あり。又一丁ばかりゆけば、夢殿といふもあり。すべてものふりたる寺也。

小泉といふをすぎて、郡山にいたる。こゝにてものなごくひつ、十丁ばかりゆけば、西の京也。薬師寺にまうでんと入もてゆく林のうちに、八幡の御社おほします。本堂は薬師仏、外に二体ある仏も赤銅にてつくり、しき石は馬腦石といふものにて、いとうるはし。かの名だかき仏足石はこの寺にありときけばたづぬるに、本堂の左にいさ、かなる堂のある中にあり。開帳させて見るに、げにいとふるきものなり。こは光明皇后のたて給へるなりとおもふに、この皇后のみしわざしのび奉られて、

たふとみて君ぞほとけのあしきわざ後のよまでにとゞめましける

えりつけ給へる御歌のさまにならひて、

いにしへのものとしもへばほとけらがあしのあとさへたふとかりけりむかしかりけり

唐招提寺も大きな寺也。この寺の門を出て西のかたに出たる所に池ありて、中に山のあるを蓬萊山といふ。こは垂仁天皇の御陵にて、「菅原伏見陵」と見えたるはこれ也。御陵のおほきくいかめしきさま、めもおどろくばかりにて、たふとし。これを見るにつけても、上つ代のさまおもひやられて、今の世のみさ、ぎのかりそめなるこそ、かへすくもかなしけれ。

この御さ、ぎのしのかたにも、上にちひさき社のある大きな塚あり。こ

をさと人は安康天皇の陵といふ。『式』に見えたるにかなへれば、これならんか。この塚のある説には、新田部親王の御墓なりともいへり。

三丁ばかりゆきて菅原の天神の御社にまうづ。こは天神の社といふはあやまりにて、『式』に見えたる菅原神社なるべし。

さて、尼が辻といふにいづ。こ、よりは只一すぢの道を一里あまりゆきて、奈良につきぬ。猿沢の池のほとりにいでたれば、まづ采女の社といふにまうづ。こは「池の玉藻」とよめる歌をもて、例の後人のつくれるにはあらじか。

まづ春日大神の御社にまうでんとて、五六丁ゆけば、一の鳥居たてり。このあたり鹿どものおほくゑて、人をもおそれず、まのあたりゆきかふは、いとめづらし。道の左に氷室神社といふおはしますは、いかなる神にかあらん。二の鳥居をこえて御社にゆくほど、石の灯籠いとおほし。御社は今も四座おはします。遷宮ちかきにあれば、つくりかへらるゝほどなりとて、仮殿におはします。その御前によみてたてまつる長歌。

春日なる 三笠の山は はしりでの よろしき山 いでたちの よろしき山
 しかれこそ 大神たちも 御心に こはし給ひて この山の 下つ岩
 根に 宮柱 ふとしきたて 久方の 高天の原に いやたかく 千木高知
 て 万代に しづまりませれ はしらなす うごくことなく 君が代を
 まもり給へば その千木の たかくたふとく 人皆も あふぎこひのむ
 大宮ぞこれ

例の心とゞめて見奉るに、かの朱もてあかくぬりて、廻廊をも同じくぬりたるは、なげかはし。みづ垣ならましかば、いかにたふとからんとおもふにつけても、廻廊にあらためたる衆徒のしわざのおもひ出られて、今さらにはらだしくなむ。

ちかきあたりに地主の神社とて、祭神は猿田彦大神なりといふ御社あり。こを猿田彦大神なりといふは、地主といふよりの例のおしあてにて、『式』に「春日神社」と見えたるにはあらじか。そは『式』に「春日神社」とあるは、此所にもとよりおはする神、それにむかへて祭神四座としるしたりとおもはるれば也。

若宮といふも有。八幡神社もおはします。こは東大寺のちかきあたりなれば、「東大寺八幡」とものに見えたるなるべし。東大寺の盧舎那仏のいともおほきなるは、今さらいふにもおよばず。胴の金の色は古くみゆれど、首の色はさも

みえず。色のかはりたるは昔より二度三度もおちて、後の世につくりかへたることいちじるし。

この仏を見るにつけては、いにしへのおもひいでらるゝまゝに、三宝の我はやつことおほしけるみことおもへばかなしくもあるか
 すめろぎの御言うれたし仏にはしづのをわれも奴といはめや

二月堂・興福寺にもまうでて、釜屋何がしといふもの、家にやどる。すべてけふまうでたる寺どもは、仏所ながらもふるくものに見えたる寺々のことゆゑ、さすがにたふとかりしは、例のいにしへをしのぶ心のくせなるべし。こよひよなかばかり、ふとめざめたるをりから、鹿の声の聞えければ、さよふかくねざめてきけば春日山かすかに聞ゆさをしかのこゑいとあはれにて、袖もほしあへずなむ。

十月一日

十月朔日。けさはいとさむければ、
 冬きぬる朝氣しられて古衣きならのさととはさむけかりけり
 宿りをいでて、率川神社にまうづ。こは子守町といふにおはして、今も御社は三座おはすれど、御名も子守明神と申て、いともくあれませるは、かなしともかなし。

三枝のまつりもたえて率川のかはりはてたる神のみやしる
 元興寺は塔ばかりのこりて、今はちひさき寺也。

一里ゆきて帯解といふにいたる。この間の畑の中に穴栗神社といふおはします。こは穴次神社をよこなまれるにはあらじか。在原といふさとは、在原寺といふがかりて、筒井筒・一村薄の古跡ありと、ことくしくいしづみにしるしたれど、例のうけがたければ、立よりも見す。

一の本といふあたりには、柿本人麿大人の御社あり。石上のさとを出はなる、所より、左のかたなるほそき道に入て、布留の御社にまうでんとす。二十丁計ゆきて御社にいたる。今も大きなみやしるにて、山のさまもかうくしき所也。
 いく千とせふつのみたまの宮ふりて杉の木立も神さびにけり

熊野山あらぶる神をことむけてみたちはこゝにしづまりいます
 もとこし道にはかへらで、丹波市のかたに心ざす。十三丁ばかりもゆきて、その宿の半にいづ。浦権現といふをすぎて、一里ばかりゆきたる所、大倭村に

て、國魂神社おはします。まうで、見奉れば、これも今に三座おはします。むかしはいともやんごとなき御社にて、姫皇子をもていつき給へりしばかりにありしものを、今はこよなくやうかはりて、宮居もおほきくはあらず、木立さへ木ぶかくはみえず、いさ、かなる家に神主のあるばかりなり。

いとくかなしくおもはれて、

あれにけりいづらやしるのおほやまと国つみたまの神にはあるらん

大やまと国つみたまの宮あれて木立もうすくみはしらの神

その神主の姓を市磯某といふよし。「市磯長尾市」とふるく見えたる姓の、そのまゝに今ものこりたるは、さすがにたふとくなむ。

佐保・柳本などいふをすぎて、しばしゆきたる道のほとりに、穴師神社の鳥居たてれど、道とほしときけばえまうです。

こゝより巻向山をいとちかく見ゆ。「みもろのその山なみに」などうちずんじてゆくもおかし。

箸中村といふ村の入口に、はし塚といふつかあり。いとも大きにて、御陵のさましたれば、倭迹迹姫命をかくし奉りたる箸墓はこれなるべし。

石むらを手ごしにこしてつくりけむはしのみはかほ今ものこれり

このみはかまさめに見ればひめこの御陰つがし、いにしへおもほゆ

里人は「むかし長者のはしをうづめたるつかなり」とも、又は「長者の家跡なり」ともいふは、例のかたはらいたし。こは長者といふは、うへもなきもの、やうにおもへる後人のいひ出たることなるべし。

島村といふをすぎて、三輪にいたる。大神の御社にまうでたるたふとさよ。折からいにしへのおもひいでられて、いはんかたなし。

いくちよかとしをへそをのながくのみ宮居たえせぬみわの神山

たふとしとみもろの神をもろくもあふぎておほく人ぞまゐくる

御山のとまつの木ばかりしげりにしげりて、こと所に、ず神さびたり。御社はなく、拜殿ばかりありて、そこより御山を、がむなりけり。これはよの常ならぬこゝちのせられて、なほさらたふとし。

さて、この御社のなきはいつのほどよりならむ。古き書にも見えたるおもむきは見えず。またくみやしろのありしさまにうたがひもなきものをや。

こゝより泊瀬にかよふほそき道あり。御社の左のかたの門を出て、その道にゆかんとす。半丁ばかりゆけば神社おはします。こは『式』に「日向神社」と

見えたるにはあらしか。

金谷といふにいで、黒崎・出雲などいふをすぎて、初瀬のさとにいたる。里の半ばかりの左のかたに、山口神社といふおはします。されど、さばかり大きな御社にはあらず。

与幾の天神といふにまうづ。こは大きな御社也。故翁は、山口神社はこれならんといはれたり。御社はこよなくみゆれば、さもあらんか。

泊瀬寺にのぼりて、舞台より見たしたるけしき、紅葉もいとおほくて、えもいはずおもしろし。

秋もはやきのふはつせの山とてやいろそめつくす木々のみち葉ふるごとなどおもひ出て、

はしりでのよろしき山のはつせ山ほとけ所となるもうれたし

とおもふも、例のかたくな心と我ながらをかしくなむ。

このさとの宇田屋何がしといふもの、家にやどりぬ。

十月二日

二日。雨ふる。

一里といふに吉隠にいたる。こゝはふるくものに見えたる所也。

萩原のさとにて、もみちのあるを見て、

名にしおふにしきも今はおりかへてもみちめにたつ萩原のさと

大野といふをすぎてしばしゆけば、川のほとりにいづ。かたへは山にて、川のなかまでつらなり出たる大きな岩有。そのうへをつたひゆくけしき、いとよし。

こゝはかたかといふ所とき、て、

たつ事はたれもかたかとおもふらむえもいは波のあかぬけしきに

名張の宿の入口に川あり。むかし五畿内のさかひにさだめたる「名張横川」はこれなるべし。この宿の矢川屋何がしといふもの、家にやどりぬ。

十月三日

三日。朝とくやどりをいで、倉持といふにいたる。こゝより山路にかゝる。「おきつもの名張の山」とよみたるは、この山のことなるべし。

おきつもの名ばりの山をけふこえてわがふるさとにあすやかへらむ

いづちゆくらんと心ぐるしくおもふ家人に、このよしはやくつてまほしくこそ。

新田といふをすぎて、七見峠といふにいたる。こゝよりは阿保七村を見おろすゆゑに、かくいふとぞ。されど、けふは雲ふかくてみわたすこともかたし。

かきくらす雲にながめもはれずしてながめな、みのたむけなりけり

阿保宿を出はなれたる所に大村神社おはします。今は大森明神とまうす。

別府・岡田などいふをすぎて、川のほとりにいづ。こゝに中山といふ山あり。「伊賀中山」とものに見えたるはこれならんか。

伊勢地といふ所にて、

里の名にまづぞうれしき故郷の伊勢路にいまだ入た、ぬまも

この宿より三里といふ山路にかゝる山中をゆくほど、かれたる薄などにふく山風の音、すゞろにもあはれ也。

この山のとむけよりいせの国なり。夕つかた垣内の宿にくだりつきて、伊勢屋何がしといふものゝ家にとどりぬ。

ほどとほく国へだてしも故郷のちかき垣内につくぞうれしき

十月四日

四日。けふは故郷もいとちかくなりぬとおもふに、日ごろすみなれたるめづらしげもなき家のことながら、かへるとだにいへば、さすがにうれしくて、宿りをいづるあしさへかろきこゝちのせらるゝは、いとあやし。

二本木といふをすぎて、大のき川をわたりて、はたのさとにいたる。

このさとのかたへの山の紅葉を見て、

もみぢ葉のにしきおるなるこゝちして一村みゆるはたの横山

小川をすぎて三渡にいたる。こゝにてむかひにときたる人々にあひたるは、先うれし。

かくて申の刻すぐるころほひ、家にかへりつきぬるうれしさは、詞にもあまるばかりになむ。

文政七年といふ年の神成月

小津久足

『石走日記』の調査・翻刻をご許可いただいた三重県立図書館、また同諸本の調査をお許しいただいた日本大学図書館・天理大学附属天理図書館に心より御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費(19K00300, 23K00320)による研究成果の一部である。

Reprinting Note of Ozu Hisatari's "Iwabashino Nikki"

HISHIOKA Kenji

Reprinting Note of Ozu Hisatari's "Iwabashino Nikki". Ozu Hisatari was a merchant of the Edo period. "Iwabashino Nikki" is a travelogue of his visits to Kyoto and other places.